
小波高校 除霊委員会

Q Q Q

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小波高校 除霊委員会

【Nコード】

N9880F

【作者名】

QQQ

【あらすじ】

どこかの高校。普通の高校。『除霊委員会』と言う、不思議な委員会以外は。この世界の均衡を保つため、『この世の異物』を取り除く物語が始まる。

I・I Start story (前書き)

どうも素人作者のQQQキュースリーです。

知らない語が出てくるかもしれないですけど、のちのち紹介するの
でスルーしてください。

では、楽しんでいってください。

I - I S t a r t s t o r y

5月21日午後8時

小波「さざなみ」高校1年・桐野楓^{きりのかえで}が帰宅した。

夕食を食べ、風呂に入り、ベッドの上に飛び乗った。

彼女は、疲れていた。陸上部の特別練習が長引いたのが原因だ。近道をしていなかったら、家に帰ってくるのが9時ぐらいになっていた。

彼女は、ツカレテイタ。

そう、彼女は、『憑かれていた』。

翌朝、5月22日午前7時

「楓、起きなさい！」

母の怒鳴り声が聞こえた。

「はい！」

彼女も大きな声で返事をした。笑いながら。

不気味に、奇妙に、この世のものとは思えない笑みで・・・

5月22日午前7時45分

ここは、小波高校のとある教室。そこは、『除霊委員会』の部屋。

「おはようございます」

「おう、おはよう」

最初にあいさつをしたのは、小波高校1年・新井修太^{あらいしゅうた}。好きな教科は、数学。好物は、てりやきバーガー、という普通の高校生だ。

そして、あいさつを返してくれたのは、小波高校2年・石橋蓮^{いしばしれん}。好きな教科は、英語。好物は、チーズバーガー。髪の色が、赤色（染めた）である。

「遅いな、くま」

『くま』とは、新井のあだ名で、アライグマからきているらしい。

そして、『くま』と言ったのは、小波高校3年・高森雛^{こうもりひな}。好きな教科（得意な教科）は、体育。好物は、フィッシュバーガー。『除霊委員会』の会長だ。

ハンバーガー好きが多い委員会である。

「ちーす」

続いて入ってきたのは、小波高校1年・神田翔侍。かんだしょうじ好きな教科は、理科。好物は、ポテトチップスコンソメ味（コンソメ以外は、受け付けない）。新井の、親友だ。

「おはようございます」

その次に入ってきたのは、小波高校2年・木乃瑞希。きのみずき好きな教科は、家庭科。好物は、みたらし団子。『除霊委員会』の副会長だ。

普通の高校生。交わることはない5人。唯一の接点は、『5人とも霊媒体質』であることだけだ。

ただの、霊媒体質じゃない。霊に取り憑かれず、霊によって起こる現象に巻き込まれる事はない。さらに、霊をはつきりみることできる。これが、『超霊媒体質』である。

「皆そろったな。新島先生にいじまから依頼が来た。今夜、中央公園の広場に集まってほしい」

新井が聞いた。

「で、どんな依頼なんですか」

「よくは知らんが、悪霊関係だときいた」

「また、そんなような依頼か。そんなことより、会長、そのしゃべり方直したほうがいいですよ。綺麗なんだし」

「ほつとけ、蓮」

「蓮も、その女誑^{たら}しを直したほうがいいよ」

「うるせえ、瑞希。俺は、女誑しじゃねえ。一途だ、一途」

「まあまあ、木乃先輩も、石橋先輩も痴話喧嘩しないで」

「おい、くま。誰が痴話喧嘩をしてるって？」

「にやはー。今日も元気だな、みんなは」

最後は、神田がしめたところで、朝のミーティングのチャイムが鳴った。

5月22日午前7時57分

「貴方のことが、す……好きです」

校舎裏に、二人がいた。

「えっ、えええ」

そこらじゅうにいそうな普通の男の子。

「だから、好きです。貴方のことが好きです」

告白しているのは、『桐野楓』。

「まだ、あつて1ヶ月ちょいだろ。何で」

「何でって。何でかって言うとなぁ・・・」

彼女が理由を言う前に、朝のミーティングのチャイムが鳴った。

「ま、まぁ、この話はまた今度ということだ」

男の子は、彼女に背を向けはしろうとした。

「何でかって、それわね」

「貴方を・・・オマエヲコワスタメダヨ」

「えっ」

5月22日午前8時1分

この時、一人の男の子はこの世から存在を消された。誰にも気付か
れずに。

もう、誰も気付かれない。あの5人以外は、誰も・・・

「ゴチソウサマ。アリガトウ」

彼女は、呟いた。いや、囁いた。

隣にいる、仮面をつけている男に、囁いた。

そして、男の子の死体は光に包まれ、消えていった。

消えていった。

5月22日午前午後5時

「くま。今日、数学の宿題出たじゃん。やっといて。」

同じクラスの、中田亜美なкатаあみがそばに来た。

「何で」

「いいじゃん。暇でしょ」

「暇じゃない」

「そんなこと言っていないのかな。小学校のころの恥ずかしい話でも、クラスの全員に話そうかな」

「なっ」

亜美とは、小学校のころからの友達だ。それ故に、とても人に言えないことまで知っている。そして、いつもこうやっていつも脅す。

「分かった」

「それでこそ、くまだね」

「亜美、早く」

「はい。それじゃ」

友達に呼ばれて、亜美はドアの方に走っていった。

「遅い」

「ごめん。ジュース奢るから」

亜美は横にいる親友『桐野楓』といっしょに教室を出て行った。

「くまさんも大変だね」。まあ、お互いががんばりましょう」

いつの間にか、隣には理科の宿題を持った神田が立っていた。

【も？ああ、今日、理科の宿題もでたな】

5月22日午後11時

宿題も（強引に押し付けられたのも）片付き、神田と一緒に中央公園へ行った。

小波高校には寮があり、生徒の3分の1はその寮で暮らしている。寮には、特別な寮『城零』^{じやうじやう}という寮がある。『除霊委員会』のメンバーは、ここで暮らしている。

「遅いぞ、二人とも」

「すみません。委員長」

「あれ、もう二人は」

「ああ、あいつらも遅刻だ」

「遅刻って、委員長、集合時間『今夜』って言ってますにや」

「何！しまった。もうそろそろ来る時間だ」

「もうすぐって、あとどれくらいですか。」

「10秒」

「えっ」「にやっ」

思考が一旦停止した。

【この人は、まったくもう】

その時、叫び声が聞こえた。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオ」

200mぐらい先で。

「ちよつ、委員長。全然場所違います」

「おかしいわね」

「そんなことより早く行きましょう」

5月22日11時28分

「何だよ、こいつ」

「知らないわよ」

車の通りが少ない交差点。二人と一つがいた。二人は、『石橋蓮』と『木乃瑞希』。一つは、『人とは思えないもの』。

「場所はここじゃないだろ」

「委員長のいつもの間違いでしょ」

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

「うるさいぞ」

「おりやあああああ」

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

「これでもくらえ」

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

「荒いな」

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ」

残りの弾が、霊に当たった。

「大丈夫か二人とも」

「委員長。遅いじゃないですか」

「すまん。場所を間違えた」

「やっぱり」

「いつもの事だけどね」

委員長たちが走ってきた。委員長の手には、刃先がオレンジ色の『
槍』が握られていた。

「おりゃあああああ」

霊の体が、縦一文字に斬られた。霊は、光に包まれてなって消えて
いった。

「終わったわね。てか、委員長遅い」

「すまん」

「まあ、いつもの事だしな」

「後は、新島先生に報告すればいいな。悪いがくま、神田、あとか
たずけしといてくれ」

『あとかたづけ』とは、霊が破壊した建物などを『修復』すること。『お札』には『除霊』用と『修復』用がある。それを使って壊れたものを直す。

「よし、今夜はこれにて解散」

こうしてそうぞうしい夜は、終わった。

「あの程度じゃ駄目か。どう思う」

「・・・・・・・・・・」

「いいんじゃないですか。あの程度でも、何体かいれば少しは戦力になりますしね」

仮面をつけた男が三人、不気味に笑っている人のようなものが五体、夜の闇に飲まれた。

I・I Start story(後書き)

1話を読んでくださって、ありがとうございます。
できれば、最後まで読んで評価をつけてください。
コメントもじゃんじゃん送ってきてください。よろしく!!

I - I I f i r s t e v e n t

『靈』と言うものは、この世の『異物』である。

靈は、死んだ人間の魂が『天界』と言う『器』から零れ落ちてできるものである。靈を『除靈』すると言うことは、靈を『天界』に戻すのではなく、《靈そのものをこの世から抹消する》と言うことだ。

5月23日午前0時

「あれから丁度102年たった。今こそ、天界に復讐する時」

その声は闇に消えた・・・

5月23日午後0時

「何でまたいるんですか」

「いや、くまの料理が美味いから」

「にゃ〜」

ここは小波高校の寮の一室。新井の部屋。そこには三人の人がいた。一人はもちろん新井。残りの二人は、神田と高森だ。寮は、男性寮と女性寮に別れていが、高森は度々来ているらしい。理由は、食費代が浮くからである。

「最近物騒なニュースが多いにや」

テレビでは、どこかで起こった殺人事件のニュースがやっていた」

「そうだな。まあ、私たちには関係ないがな」

「そんな事言わないほうがいいですよ。はい、できました」

机の上には、四人分の焼きそばが置いてある。

「それにしても遅いな。もう昼だぞ」

「それは、委員長が朝から居るからでしょう」

ガチャ

玄関の扉が開いた。

「いや、すまんすまん」

新井の部屋に、『除霊委員会』担当の新島正治にいじまやほるが入ってきた。

「遅いです先生」

「えっ、合ってるよね。時間どおりだよ」

「委員長が早いんですにゃ」

部屋には、焼きそばの食べる音が響いていた。今日は土曜日である。土曜日と日曜日には、大抵高森と神田が新井の部屋に来る。新井にとっては、その分食費代がかかるので財布には優しくない。それに今日は新島先生も来てるので、今、冷蔵庫の中はろくな物がない。

【今日、買い物に行こ】

新井はそう思いながら新島先生に渡された書類を見ていた。

「今週の金曜日にうちの学校の生徒が一人殺された」

「・・・」

全員が黙った。

「君たちには、その子がどうして殺されたのか、どうやって殺されたかを調べて欲しい」

「何で俺たちだけなんですか。木乃さん達は」

「ああ、あいつらは友達と遊びに行っている」

「・・・」

違う意味で全員が黙った。

「すみませんにゃ。俺も今日は用事があるんですにゃ」

「私もだ」

「何だ、二人とも用事があるのか。しかたがない、新井任せた」

「ええええええええええ」

「よろしくですにゃ」 「すまん、新井」

新井は一人でこの事件の捜査をしなければならなかった。

「はー、最悪だ」

ちなみに、『最悪だ』は新井のこの頃よく言う台詞である。

「じゃあな」

新島先生は焼きそばを食べ終わると、さつさと新井の部屋から出て行った。部屋の中には、焼きそばの食べる音だけが響き渡る。

I - I I I lowest day

5月23日午後0時50分

土曜日の小波町は、意外と人が少ない。人影が少ない道を、新井は歩いていった。すると後ろから声が聞こえた。

「おい、くま」

中田亜美が声をかけてきた。

「最悪だ」

「ん？何か言ったかくま」

「何にも言ってません」

亜美に係わるとろくな事がない。新井は長年の勘で分かるらしい。

「それじゃあな、亜美」

「まで。まさかとは思うけど、逃げるんじゃないでしょうね。逃げたらあんたの恥ずかしい裏話をネットで公開するぞ」

「笑えないな」

亜美は本気でこういう事をする人だ。それを新井は知っているので亜美には頭が上がらない。

「それで亜美は何をしてるんだ」

「いろいろ。シャープペンの芯が無くなってたから買いに行こうと思っただけが入った訳。くまは何してるの」

「俺は、委員会の仕事で調査をしてるわけ」

「ふーん。委員会、委員会ってそればっかだと人生腐るよ」

「お前の人生は腐ってるけどな」

「あれ、どこからか声が聞こえるなあ。何々、世にも恥ずかしい新井の裏話を学校中に広めろって」

「すみませんでした。それだけは勘弁」

「じゃあ、買い物ついでにデートしようか」

「はいはい、分かりましたよ亜美サン」

わざとらしく返事をしたのが不満なのか、亜美は新井の頭を一発叩いた。

「よう、デートですかお二人さん」

商店街では有名なほうの駄菓子屋『千代』の店長、滝千代彦たきちよひこが話しかけてきた。

「こんにちは、千代さん」「こんにちは」

新井と亜美は、店の中に入ってしまった。

「いや、幼馴染はいいね。ほれ、俺の奢りだ。受け取れ若僧ども」

滝は、二人に一個50円ぐらいのチョコレートを三つずつ渡した。売れ残りの品は、いつも小波高校の学生に無料で渡される。

「ありがとうございます、滝さん。この間はいつも」

「いって、。気にすんな」

「ねえ、滝さん。この間って、どの間」

「ああ、この前委員会の仕事でいろいろあったんだ」

「滝さん」

「・・・ああ、そう言えば亜美ちゃんには委員会の話は禁句だったかな」

亜美は、『除霊委員会』の事を良く思っていないらしい。そのため、彼女に委員会の話をする可不機嫌になる。新井にとっては、八つ当たりをしてくるのではつきり言って迷惑だ。

「まあ、お二人さん。これからデートならがんばってらっしゃい」

「よし、行こう。それじゃあ滝さん。チョコレート、ありがとうございます」
「さいました」

まだ拗ねている亜美を引張って駄菓子屋を出た行った。

5月23日午後1時10分

「よし、それじゃあまずは、シャー芯を買いに行きましょう」

「おー」

傍から見ればとても痛々しい言葉の掛け合いだが、今日は人が少ない。新井は、ほっとする。これで亜美の機嫌も直った。八つ当たりもしてこない。新井は、心の底から安心した。

「で、どこで買うわけ。そのシャーペンの芯」

「デパート『市倉』で買おう」

デパートと言っても都会のデパートよりも小さい。商店街の妨げになる事はない。むしろ、商店街の皆と手を取り合っていていかなければ潰れてしまいかもしれないデパートだ。『商業協定組合』と言う物もできているらしい。そんなデパートだが、品揃えはだけはいいと評判だ。

「よし。場所も決まったことだし、行きますか」

5月23日午後1時30分

デパート市倉の店内。文房具売り場。

「むう……、まさか市倉でも無いのか」

シャー芯の売り場には、何も無い棚だけがあった。早々、売り切れる、と言う事は無いので運の悪さに亜美は肩を落とした。

「ま、まあ、また入荷するだろ。それまで、俺のシャー芯を貸してやるから」

「本当！それなら安心ね」

急に元気になった亜美に驚きながらデパート市倉を出る。

「そうだ。ジュース買ってくるは。亜美は何がいい」

「炭酸系」

「はい、分かった。じゃあ、買ってくるからそこらへんに座ってる」

それだけ言つと新井は自動販売機があるほうに走っていった。

「ああ、暇だなあ」

亜美の悲しい声が空に響き、消えていった。

5月23日午後1時40分

「あいつ、何が炭酸系だよ。飲めないくせに」

ぶつぶつ言いながら、新井は歩いている。手には、レモンティーが二つ握られていた。

「ん？あれは」

新井の目の前には、いかにもヤンキーな感じの人たちに囲まれている亜美がいた。

「ねえ、君可愛いね。いつしよに遊ばないか」

「おい、それは古いんじゃないか」

「まあ、とにかくいつしよに遊ぼうぜ」

【やれやれ、今日は本当についてない。ああ、最悪だ】

そう心の中で思いながら新井は手に持っていたレモンティーの缶を投げた。

ゴン

缶は、ヤンキーにクリーンヒット。

「痛ってえじゃねえかコノ野郎。何だよお前。こいつの彼氏か」

「まあ、そんなところだ」

新井は、何事もなかったように亜美のそばまで行き、手を掴んでヤンキー達から離れていった。

「おい、俺らを舐めんじゃねえぞ」

ヤンキー達の手には、ナイフやら何やら、人を殺せそうな凶器があった。

「亜美、走るぞ」

新井と亜美は走った。ヤンキー達もその後を追う。

「くそ、しつこいなあいつら」

新井は、裏道に入る。

「くそ。二手に別れるぞ」

新井の入った裏道は、道が二つに分かれているＴ字路だった。

【くそ、どっちに行く。もうこうなったらどっちでも良いや。左だ左】

新井の選んだ道は、一直線上だった。その目線の先には一人のヤンキーが、後ろには二人のヤンキーが走ってきた。

「や、やべえ。挟み撃ちにされた」

「ど、どうするのよ、くま」

「はあ、はあ、はあ……。やっと追いついた。観念しやがれこの糞ガキどもが」

道は一直線。前にも後ろにも、手に凶器を持ったヤンキー。

「しかたが無い。かかって来い、ヤンキーども」

「くま。くつ、やめろ」

亜美が止める。

「へん、彼女の前からってかっこつけるのは良くないぜ。この糞ガキイイイイイイ」

ヤンキー達が同時に新井目掛けて走ってきた。新井もヤンキー達の方に走っていった。

「やめてくまー」

亜美の叫び声だけが空に響き、消えていった。

I - I V m a t t e r s i g n

薄暗い裏路地。太陽が雲に隠れて、より、いつそう裏路地は暗くなつた。裏路地に置いてある自転車の近くには、ナイフが転がっていた。

血の付いたナイフが．．．．．

5月23日午後1時55分

「うううう．．．うううう」

男の呻き声が聞こえた。

「く、くま。遣り過ぎだろコレは．．．」

「最初に喧嘩を吹っ掛けてきたのはあいつらだろ」

暗い裏路地には三人の男達（もとい、ボコボコにされた男達）が倒れていた。

「うううう．．．」 「い、痛い．．」 「あああああ．．．」

皆、それぞれに声を出している。

「これに懲りたら、もうこんなもの持って人を襲うな」

新井は、落ちていたナイフを男達のほうに蹴った。新井は、喧嘩が強い方である。昔からよく、いろいろな人から喧嘩を吹っ掛けられたほうだ。もう一度言っておくが、新井は喧嘩が強いほうである。

「だから止めると言ったのに。まったく、人の忠告を無視するからこうなるんだぞ」

亜美は、新井が喧嘩に強いことを知っている。知っていると云うよりは、何回も新井に助けてもらったことがある。小さい頃から新井が喧嘩に強い事を知っている。だから、ヤンキー達に「やめて」と言っただのだ。

「さて。こんな所、さっさと出ますか」

「こんな所って、お前がやったんだろ。全く、お前は本当に喧嘩が強いな」

「誰のせいだよ」

新井が喧嘩に強いのは、と言うより喧嘩に慣れているのは、幼馴染を何度も何度も不良やら、何やらから守ってあげてたのが原因だ。

「じゃあ、行きますか」

新井と亜美は、暗い裏路地から出て行った。

5月23日午後2時

「うううううううううううう」

暗い裏路地に男達の声が響き渡る。

「ははははははははは。まったく、無様だなあ」

仮面をつけた一人の男は笑いながら男達に話し掛けた。

「な、何だデメエは。あいつらの仲間か。そうじゃなくてもなあ、こっちは今、イライラしてるんだ。悪いが、気分転換させてもらうぜ。死ねエエエエエエ」

三人の男たちが仮面をつけた男に向かって、一斉に走り出した。

「そっちな」

三発の銃声。それと同時に倒れる男たち。裏路地の近くを通った人は、あれだけ五月蠅い銃声にも何の反応も無い。まるで、銃声が聞こえていないみたいに・・・

「うううううううううううう」

苦しい悲鳴をあげる男たち。

「こいつら喰っても良いぜ」

その声が合図だったように三体の得体の知れない固体が男達の周り

を囲った。

「やめ・・・やめろオオオオオオオ」

三人の男たちは、光となつて消えていった。

「そんな腐った奴らを喰わせてどうするんですか。何の足しにもなりませんよ、×^{ベグ}さん」

×と呼ばれた男は仮面を外した。外した仮面を地面の上に投げ、男達を撃った銃で仮面を撃つ。銃は、西部劇にでも出てきそうな銀色のリボルバーの銃だ。

「いや、足しにはなるぞ。こんな奴らでも、何百人、何千人と喰わせれば物凄い力になる」

「そんな事言つても、そんなにも人を喰べたらいくら何でもあいつらが気付きますよ」

そう言つた男は、仮面を脱いで×の方に投げた。

「大丈夫だ」

×は、眼鏡を掛けながら、その仮面を撃った。眼鏡の縁は青色で、髪の色は銃と同じ銀色。横にメッシュがはいっている。そのメッシュの半分が黒色で、もう半分は白色になっている。仮面を投げた男の髪の色は、深みのある黄色で、×と同じくメッシュがはいっている。メッシュは、半分が黒色で、半分が白色になっている。

「何が大丈夫なんですか」

「気付かれたら気付かれたで、倒しちまえば良いだけだ」

「……。はあ、まったく、それがどれだけ大変か分かっているんですか」

「ああ、分かってるさあ」

不適に笑う×。

「……。何を考えているんですか。まさか、伍領郭ごりょうかくを使うつもりか。あいつらはまだ使える状況じゃない。考え直せ、×。他に良い手があるはずだ」

「感情的になるな、Σ。シグマ。大丈夫だって言ってるだろ。手なら幾らでもある。まずは、手始めに『桐野楓』でも使ってみるか」

「あ、あいつを……。何を考えてるんですか。あいつは伍領郭ですらないじゃないですか。あんな奴に『除霊委員会』の連中を仕留める力なんてないですよ」

「俺に何回大丈夫だと言わせればいい。山の準備シヤをしておけ」

「くう、分かりました。やればいいんですよ。やれば」

「ああ、まかせたぞ」

5月23日午後2時30分

「は、今日は疲れたな」

「そうだな」

亜美は、パフェを頼張りながら答えた。

「てか、何でお前はランチFを食べてるんだよ。誰が金払うと思ってるんだあ」

亜美は、パフェを頼張りながら新井を指差した。新井と亜美は、裏路地を抜けた後、ひとまず小波町の商店街に一つしかないファミレスの店内に入った。ちなみに、ランチFはこの店で一番高いランチだ。その値段は1900円だ。

「やっぱりな」

そう言いながら、新井は机の上に2000円を置いて席を立った。

「な、何だよ。もう帰っちゃうのかよ」

「帰るんじゃない。こっちとら調査を頼まれてんだ。今日中にやっとかないとな」

新井はそう言つと、自動ドアが開いた瞬間に店内から出て行った。

「お、おい。何だよ。本当に帰っちゃうのかよ」

亜美は、机の上に置いてある二千円を見ながらパフェを食べた。

「……………は。明日にでも返しておくか」

そう言うと、亜美は二千円をポケットにしまった。

I - V m o m e n t a r y r e s t

5月23日午後6時

「こんだけ聞き込みとかしても、何の手がかりも無いのかよ」

途方に暮れていると、前方から神田が歩いてきた。

「おーい、修ちゃん。こっちだにや」

ちなみに、新井のことを修ちゃんと呼ぶのは神田だけである。

「ん？おう、神田か。用事は済んだのか」

「おかげ様で」

「で、何してるんだお前は」

「いやさ、修ちゃんが困っていると思ったから手伝おうと・・・」

「嘘だな」

新井は神田の言葉を遮って言った。

「ばれてますか」

「当たり前だ」

「実はですねえ、修ちゃんの仕事とは別件で新島先生に頼まれたん

ですにゃ〜。それでね、その別件と言うのが何故か『小波高校生徒殺人事件』と関係があるみたいなんですぜエィ」

「一体どういう関係だ」

「それはですね、殺され方の類似点多すぎるんですにゃ〜。というか、全部いっしょなんですにゃ〜」

「それはまた不思議だな。で、その事件ってのは何だ」

「今日の昼にテレビでやってた連続殺人事件の事ですたい」

神田は、ちよくちよく語尾にいろいろ変な言葉をつける癖がある。最初は新井も慣れなかったが、今は、そのしゃべり方じゃなくては逆に不自然だ。

「用は、犯人がいっしょでまだこの辺をうろついてるんですにゃ〜」

「はあ、まだこの辺をうろついてんのか。だったらヤベーじゃん」

「心配いらないですぜエィ。この事件は霊の仕業って事ですから、『特別除霊軍』が出動しているにゃ〜」

『特別除霊軍』とは、自衛隊直属の軍隊であり、霊専門の警察みたいな物である。小波町周辺の区域を中心に日本全国に展開している。

何故、小波町を中心としているかと言うと、小波町は世界で一番天界に近い所だと言われているからである。実際に、毎年12月12日に小波町の穂都掘神社ほとほりじんじやの鳥居から天使が出てくる。

日本は、天界と交友関係を築き上げた。そして天使は、「霊がこの世界に下りるとき、災いが起こる。それを阻止するために『超霊媒体質』の人間を天界は創る。そいつらを使って霊を除霊しろ」と言った。日本の政府は天使の言葉を信じ、いち早く霊にたいしての対策を打った。そして、現在に到る訳である。

「じゃああ、俺達は帰りますか」

「そうだにゃ」

新井と神田は、学生寮に帰っていった。

5月23日午後7時

小波高校の男子学生寮の前。

「あ、お兄ちゃん」

そんな妹ボイスで新井と神田は振り返った。

「おう、舞」

「お久しぶりですよにゃ」

彼女の名前は、新井舞。あらいまい新井修太の双子の妹である。同じ小波高校の1年生で、ちよつとした霊媒体質である。

「おい舞。先に行くなよ。あ、お兄さんこんばんわ」

彼の名前は、柿本徹。かきもととほる同じ小波高校の1年生で、舞の彼氏である。ちなみに、新井は1年6組で、柿本と舞は1年3組である。

「おい、止めてくれよ。同い年だろ。お兄さんってのはちょっとなあー」

「良いじゃん別に。そんな事気にしない。ところで、お兄ちゃん達は何やってたの」

「ああ、委員会の仕事だ」

「また〜。そんなのばかりやっていると、人生腐るよ」

「亜美もそんなような事言ってた」

「会ったんだ。どう、少しは亜美さんと進展した」

「元々何もねえーよ。お前らはどこに行くわけ」

「地元の祭り」

「そつえば、今日、祭りがあったな」

「忘れてたですぜエイ」

小波町には、5月22日に行く、『小波町感謝祭』と言う物がある。『小波町感謝祭』とは、小波町の創立を祝うために作った小波町独

自の祭りである。

「それでは行つてきます、お兄さん」

「じゃあねえ、お兄ちゃん」

柿本と舞は、祭りに行くために中央公園に向かって歩いていった。柿本達が見えなくなつてから、新井の携帯にメールが入った。

「では、俺達も向かうとするか」

新井は、メールを読み終わるとそう言った。

「どこに行くにや」

「小波町感謝祭にだよ」

新井と神田も、中央公園に向かって歩いていった。

I - V I r i p p l e s t h a n k s f e s t i v a l

5月23日午後7時30分

「やってますですぜエイ」

「そうだなあ」

新井と神田は、小波町感謝祭がやっている中央公園についた。

「遅いぞお前ら」

高森が声を掛けてきた。隣には石橋と木乃が立っていた。

「遅いって、これ位掛かりますよ。で、その二人は今まで何してたんですか」

「何って言われてもなあ、ちょっと野暮用があっただけだ」

「野暮用って遊ぶことですか」

「ああ、ばれてるんだ」

「新島先生が言ってたにや」

「いや、木乃が誘ってきたからさあ」

「はあ、お前が誘ってきたんだろ」

「喧嘩は止めてください。ところで委員長、何の用ですか」

「実はだなあ、新島先生に特別除霊軍から連絡があつて、何でも連続殺人事件の犯人が霊でなあ、その霊がこの町に潜伏してるらしいんだよ」

「あ、それは知ってます。神田がその事について調べていたんで」

「ですよ」

「そうか。それでな、その霊がまだまだ魂を欲しがってるらしいんだよ。で、今日は、小波町感謝祭があつて人が集まるだろ。だから霊が来るかもしれないから私達がその霊を除霊しろってさ。特別除霊軍は、表立って行動できないからな」

小波町感謝祭は、12月12日に天使が安全に来るようにする一種の儀式みたいなものだ。そのため、特別除霊軍が表立って行動すると感謝祭が中止になるかもしれない。政府は、天使との交流が鎖されることをに危機感を持っている。天使が日本を消す事など造作も無い事なのだ。

「そう言う事よ。じゃああ、3グループに別れて捜査しましょう。その方が効率も良いわ」

「それで、どうやって決めるんだ」

「よし、コレならどうだ」

高森が言う。

「じゃんけんだ」

5月23日午後7時50分

「は」

じゃんけんで一番最後まで負けた石橋は一人で中央公園の周りの道を歩いていた。石橋は、生まれてこの方じゃんけんに勝ったことが無い。

「委員長。ゼッテー俺が負けるって分かってるくせに」

ちなみに、新井と高森のペアと神田と木乃のペアに別れた。石橋が歩いていると、前方に人影が見えた。あちらも気づいたようだ。

「ん？あれは……。おい、男女」
おとこおんな

「な、お前。その呼び方止めろっていつてるだろ」

「何言つてんだよ。もうその呼び方には慣れてるだろ」

「まあ、そうだけどな。てか、お前が呼び始めたのが原因だろ」

男女と呼ばれたのは、小波高校2年4組、むらさめともき村雨智樹。性別は男だが、顔は美形だ。というより、美人な女性を思い浮かべることができる。男女というあだ名は、石橋が呼んでいたら勝手に定着した。

「石橋、今から一緒に回らないか。どうせ暇だろ」

「ん？今からか……。よし、回ろうではないか。楽しもうではないか」

「テンションを急に上げるな。ドンだけ暇だったんだよ」

「このまま独りだったら多分泣いてたかも」

「泣くんかい」

ニコニコ笑顔の石橋と少し不機嫌な村雨は、中央公園の中央通りを歩いていった。

5月23日午後8時

中央公園は、公園と言う割りには広いので一度友達とでも別れるとなかなか会えない。

「委員長！どこに行ってたんですか」

「すまん。そこでたこ焼きが売っていたからついな」

「お祭り気分で楽しんでるんじゃないですか。ちゃんと仕事もしてくださいよ」

「まあ、いいじゃないか。何にも起こってないしさあ。ほら、お前の分のたこ焼きだ」

「・・・。ありがとうございます」

公園なのでそこら辺にベンチなんかもある。新井と高森はベンチに座ってたこ焼きを食べている。すると新井は、人ごみの中にいる一人の人物を発見した。

【あれは、たしか・・・】

その人物は人ごみの中に消えていった。

「委員長、これ持っててください」

「えっ、お、おい。新井。どこに行くんだよ」

高森が叫んでいるが、そんなことは気にせずに新井は人ごみの中に紛れていった。

5月23日午後8時8分

「今日はいつもより平和ですにゃ」

「そうね。でも、平和でなによりじゃない」

神田と木乃はベンチに座って、たこ焼きを食べながら言う。

「あと一時間でこの祭りも終わりね。本当に霊なんて来るのかしら」

「それを言ったら俺たちの意味がないですにゃ。まあ、お互いが

んばりましょうにゃ」

そんなことを言っていると、前方から高森がやって来た。

「あ、あれ。委員長。新井と一緒にじゃなかったんですか」

「ああ、何かこれ持ってたか言っただけで行っちゃった」

その時、神田の携帯電話が鳴った。

「もしもし。どちら様ですたい」

高森と木乃は、神田をじっと見ている。

「はい。はい。分かりました」

神田の顔が真剣になっていくのが分かる。言葉も普通になっている。

「では、また何かあったら電話をください」

神田は電話を切ると高森たちの方を向いて言った。

「洗濯物を入れておくのをわすれてましたにゃ。風でどっかに吹き飛ばされていると寮の管理人が電話してきたんですたい」

高森と木乃は、古典的に滑りそうになった。

「じゃあ、もう行って来い。さっさと洗濯物入れてくるように」

「了解ですたい、委員長。では、行ってきますにゃ」

神田は立って辺りを見回すと、人が少なそうな道を走っていった。

「ねえ、委員長。これからどうする」

「とりあえず、このたこ焼きを持ってくれないか」

高森は、木乃にたこ焼きを渡すとベンチに座った。

5月23日午後8時15分

「まったく、特別所霊軍のお偉い様方は無理ばかり言いますにや」

暗い夜道の中を神田はぶつぶつ言いながら走っていた。

I - V I I d e v e l o p m e n c h a n g e

5月23日午後8時20分

「どこに行った」

新井は公園から出て、人影のない道を走っていた。周りには普通の家が並んでいる。

「くそ。見失った。何処に行きやがった」

新井は公園のほうに戻っていった。そのとき、前から3人の男が歩いてきた。

「・・・・・・・・・・」

前から歩いて来る男たちは何も喋らない。瞳は新井だけを見ている。

「あいつは・・・」

3人の男の真ん中には、殺された小波高校の生徒がいた。

「・・・・・・・・・・」

後ろからも同じように、3人の男たちがやって来た。

「おいおい、今日戦ったばっかじゃねえか」

後ろから来た男たちは、今日襲ってきたヤンキー達だった。

「・・・・・・・・」

男達は新井に向かって走り出した。そして、20メートルもの差を一瞬にして詰めた。

「つつ・・・」

新井は両脇から来る拳を避け、ヤンキーの1人に蹴りをいれてから空いた道を男達から離れるように走った。新井はまた20メートルぐらい距離を開けると、後ろのポケットから革製の手袋を取り出した。

「さて、やるか」

新井は手袋をはめた。手袋の色は黒色で、手のひらには十字に白いラインが入っている。この手袋は新井専用の『お札』だ。そして、前にいる男達は霊にとり憑かれている。

【しかし、妙だな。死んだ人間に霊がとり憑くなんて】

男達は新井に向かって走り出し、さっきのように20メートルの差を一瞬にして詰めた。男達が来た瞬間、新井は1人の男の腹部にパンチした。男は3メートル弱飛んでいった。

「おらよ」

新井は男達の攻撃を避け、次々にパンチをきめていく。しかし、男達は全くダメージをくらった様子はなく、次々に立ち上がる。

「手強いなあ。全員倒せるかな」

新井が喋り終わった途端男達が走ってきた。今度は4人が先に走ってきて、その後ろに残りの2人の男が走ってきた。

「またゾロゾロと、ゾンビみたいに来やがって。逃げるのは無理か」
20メートルの差を一瞬にして詰める相手に、背を向けたら自分から殺してくださいと言っているようなものだ。

「があああああああああああ」

男達は、そう叫ぶと新井に殴りかかってきた。

バキッ

その音が誰もいない道に響く。

5月23日午後8時25分

高森と木乃は公園のベンチに座っていた。たこ焼きは当の昔に食べ終えたようだ。

「神田は良いとして、くまのやつは何所に行ったんだよ」

「探しに行ったほうが良いんじゃないですか。ついでに搜索をしましょう。あれ、委員長。何所見ているんですか。私の話ちゃんと聞いてますか」

「おい、木乃。あ、あれって……」

「何ですか？あつ。あれは石橋」

「隣に何人かいるな」

高森たちの視線の先には、屋台の射的ゲームをしている石橋の姿があった。その隣には村雨と、途中であった小波高校2年6組、飯田^い美羽^{みう}、同じく2年6組、塩祖流斗^{しおそると}がいた。

「何やってんの石橋。遊んでないで仕事しろ仕事」

「ま、まで。あと一回。あと一回だけやらせてくれ。もう少しあのウサギの人形が落とせそうなんだ」

「石橋のやつ、まだやるきだぜ。もう3000円持ってかれてるのに……」

「えええ、そんなにやってるの」

「ああ。俺と会ったすぐ後に射的やりだしたんだ」

「そして私達が射的をやっている石橋君達を見つけたわけ」

「てか、サボってたのか。これは罰則だな」

「ええ。委員長、それは無いぜ」

「サボってたあんたが悪い。てか、射的なんてあんたには無理よ」

「なんだと木乃。じゃあやってみるよ。出来なかったらここで土下座な」

「石橋君。そんな事までさせなくても良いんじゃないかな」

「いや。ぜつつつつつたいにやってもらう」

塩祖の提案は石橋によってバツサリと切り捨てられた。

「いいわ。やってあげようじゃないの」

「ちよつと木乃ちゃん」

「おい木乃、大丈夫なのか」

「心配しないで、美羽ちゃん、委員長。じゃあアンタが負けたら一週間私の家来な」

「の、望むところだ」

「何でも良いから早くしてくれないかな。もうそろそろ屋台を解体したいのだが」

店のおじさんがそう言うと、木乃は財布から500円玉を取り出して弾を5発貰った。狙いは、石橋が取れなかったウサギの人形。

「早く5発とも外して土下座しろ」

後ろから石橋の声が聞こえたが、木乃は無視した。狙いを定めて撃

った。

パン、という音が鳴って、弾が人形に向かって一直線に飛んでいった。正確に言うと、人形を垂直としたときの45度あたりのところに飛んでいき、45度あたりのところに当たった。人形は一回空を跳び、後ろの壁に当たって下に引いてあるネットの上に着地した。

「はいお譲ちゃん。よく捕ったね」

そう言って屋台のおじさんはウサギの人形を木乃に手渡した。つまり賭けは木乃の勝ちで、石橋は一週間家来として木乃の命令を聞かなければならない。

「う、うそだあ。そんなに簡単に取れるはずがない」

「よく考えてみなさい。私がいつも除霊で使っている『お札』は何」

「ええっと、いつも除霊で使っているお札は『拳銃』で………
つてお前ズリーだろ。今の賭けは無しだ」

「ふざけんなよ。こっちは、この勝負のために500円使ったんだぞ」

「500円くらい何だよ。そんなにお前ん家は貧乏なのかよ」

「石橋。男は約束を守らなくちゃいけないぜ」

村雨が石橋の肩に手を置いて言う。表情は若干笑っているように見える。

「てんめえ、いつからそっちに寝返った。ってか、飯田も塩祖も委員長も、何でそっち側にいるの。頼む誰か俺側に来てくれ。お願いします、助けてください。あーもう、ヘルプミーーーーー」

叫びも空しく、石橋はさっそくジュースを買いに行かされた。

I - V I I I f a l l a n g e l e n t r a n c e

5月23日午後8時50分

「はあ、自販機は近くに無いし、屋台で買おうと思ったら解体して閉まつてるし、もう最悪だよまったく」

石橋はジューズを6本手に抱えて射的の屋台の所に戻ってきた。射的の屋台はもう解体して無くなっている。周りには屋台もほとんど無く、人もあまり居ない。

「あれ。みんな何処に行ったんだ」

周りにはさっきまで居た木乃達が居なくなっている。

「あの、すみません。お聞きしたいことがあるのですが」

石橋は、近くにあったリング飴の屋台の店番をしている20代ぐらいの男に話しかけた。男は椅子に座って、タバコを吸いながら石橋を見上げた。

「あそこにいた人たちを知りませんか」

「ああ、確か慌てて皆であそこの道を走って行ったな」

「そうですか、ありがとうございます」

「ふっ、お安い御用だ。だが、お前はあの道を通れない」

「えっ、今何て言」

バコン

男は石橋の言葉を遮り、頭部をおもいつき殴り飛ばした。石橋は反対側の木にぶつかって動きを止めた。石橋の殴られた額のところから血が垂れてきた。

周りの人は何が起こったか分からず、ただ沈黙しているだけだった。

「ぐうう、くそ。やってくれるじゃねえかよ」

石橋の手につけていた指輪が光だし、『日本刀』の形を作っていく。

『皆さん、非難してください』というアナウンスが流れて1秒の間を置いてから、石橋と男を残して全ての人はこの場から逃げていった。

「お前、ただの人間じゃねえな。だが、霊とも違う。お前は何なんだ」

石橋は、日本刀を鞘から取り出し、鞘をどこかに投げ捨てた。

「その質問には、今は答えないとしておきましょう。でも、あなた達は私達のことを知っている筈なんですけどね」

男の口調が変わり、男の顔がまるでロウソクのロウのように溶け出した。そして、その下に新しい顔が見えた。男の髪の色は、深みのある黄色で、メッシュがはいっている。メッシュの色は、半分为白色で半分为黒色だ。

「名前は名乗っておきましょう。ラオン・ネーゼル・シグマといいます。気軽にΣ^{シグマ}とでも読んでください。まあ、そんな事はどうでも良いんです。これに見覚えがある筈です」

そう言つて、Σは自分の髪の毛のメッシュを指差した。

【まさか……。いや、そんな筈はねえ。それに、もし仮にもそうだとすると、何でこの季節にここに居るんだ】

石橋の反応を見て「クスッ」と一回笑うとΣは言った。

「貴方の創造通りですよ。たぶんね。だからこんな事も出来ます」

Σは、右手を自分の胸の辺りまで上げ、左から右へ横一文字に動かした。動かした右手の跡に沿って薄い緑色のエネルギー体が出来た。さらに、縦にも同じものを作り、薄い緑色のエネルギー体で十字架を作った。

「それでは、これが最後になるかもしれませんので、とりあえず言っておきます」

Σは、薄い緑色のエネルギー体で出来た十字架の縦のエネルギー体と横のエネルギー体の重なっている所に手のひらを当てた。

「バイバイ」

その言葉が合図だったかの用に、Σが手を当てた所から漫画で見たことのあるようなエネルギー波が石橋に向かって猛スピードで発射された。そのエネルギー波は石橋に当たり、その場で爆発した。

地面は無残に捲れ、木はいろいろな方向になぎ倒されている。普通なら人が即死レベルの攻撃だ。

「残念でした」

そう、普通なら即死だ。しかし、石橋は『超霊媒体質』の人間であり、霊を除霊する『お札』の日本刀が只の日本刀の訳がない。

「こいつの能力は、簡単に言っちゃえば霊エネルギーを吸収するって訳だ。お分かりかな、天使さん」

霊エネルギーというものは、この世の生きている物全てにあるエネルギー。このエネルギーは、人が生きていく上での生命力となり、霊はこれを主食として人を襲う。、除霊にもこのエネルギーが必要になる。このエネルギーの量は、個人個人でばらつきがあり、『超霊媒体質』の人間は普通の人間の20倍の霊エネルギーを持ち、霊は普通の人間の50倍の霊エネルギーを持つ。そして天使は、普通の人間の100倍の霊エネルギーを持つ。

「そうだよ。さっきの質問の答えは『天使』だ。あと、君の刀の能力は知らなかった。敵に説明するなんて、バカだね君は」

「何で天使がこの季節に居る。12月12日の『天使の下界移動』エンジェルアポメントの時にしか来ないんじゃないかなかったのか。それに、12月12日以外に天使が下界に来ると、全ての天使の力を無くしちゃうんじゃないのかよ」

「貴方は、『人魂増減』じんこんぞうげんって歴史の教科書で習いましたか」

「ああ。何か人間の魂が増えすぎて天界のバランスが悪くなって天国が拡大していったって、地獄が消えて無くなりそうになったってやつか。でも、今は関係ねえだろ」

「それが関係大有りなんですよ」

「何だって」

「本来、天国と地獄っていうのは、天界では機関を表しているんです。実際は、天国と地獄という国になっていて、役割が決まっているんです」

「それは知ってる。天国が『天使審判で魂を天国に滞在させるか、下界で罪を犯した魂を地獄に送るか決める』所で、地獄が『送られてきた魂の罪に対しての罰をあたえて、罪を洗い流す』所だろ」

「まあ、大体はあっています。天国で犯した罪も天使審判によって裁かれ、有罪だったらその魂は地獄に送られます。そして、魂というのは無限に繰り返します。下界では『魂循環』たましいじゅんかんといってましたかねえ。でも疑問じゃないですかあ」

「何がだ」

「だって、魂は循環するんですよ。それなのに霊が出るなんておかしいとおもいませんか」

「それは、人間が子供を作りすぎて罪を流しきれない魂を使うのはまずいから神様が魂を作ったんじゃないかねえか」

「そう、神は『神工魂製造機』しんこうたましいせいぞうき』というのを作って魂を作った。しか

し、それが原因で起こったのですよ、人魂増減が」

「どういうことだ」

「人間の魂はたくさん罪を負って天界にやってくる。そして、地獄に送られる。その間に下界では子供がたくさん生まれる。神は魂を作る。こういった悪循環で、人間の魂が天界にあふれるほどになったんです。そして、天使審判が行えず、魂が天国で好き勝手に暴れだし、天界のバランスが崩れてきました。後は、あなたの言う通りです」

「お前が今、ここに居る理由にはなっていないぜ」

「まだこの話には続きがあるんですよ。では、人魂増減はどうやって治めたと思いますか」

「それは、神様の力で何とかしたって聞いてるぞ」

「ふはははは。やっぱり都合の良いように書き換えられていますか。神にそのような力があつたら、人魂増減なんて事になる前に何とかしてます」

「じゃあ、どうやって」

「簡単ですよ。魂とは霊エネルギーの塊です。そして天界は霊エネルギーで作られた世界です。魂の増えすぎということは霊エネルギーの増えすぎでもあるのです。そして神は、魂よりも強い霊エネルギーを持つ者を天国から地獄に送れば、また均衡が守られるという一時的な駄策をしたんです。そして、天国で魂より強い霊エネルギーを持つ者といったら『天使』しかいません。知ってますかあ。天

使は地獄に行くとは自動的に悪魔になるんですよ。そして、総勢500もの天使が地獄に送られました。これを、私たち天使の中で『天使流し』と言います」

「だが、それで一応事態は收拾できたんだろ。それに、お前がここに居ることとは全く関係はねえぞ」

「事態が収集したねえ……。私もそれで終わってくれたらよかったのに、と思いますよ。実際、それだけでは人魂増減を抑えることができませんでした。そして神は、もう一回天使流しをすることにしました。今度は、本人の了解無く、勝手に神が選んだ50人の天使がね。一口に天使と言っても、天使は4段階に分かれているのです。そして、その中で神の主要としている最上段階の『神の5本指』以外の2段階以下の天使が流されました。俗に、これを『天使流し』と言います」

「だけど、地獄に送られたんだろ。ならなぜここに居る」

「地獄には送られませんでしたよ。天使流しの一回目で地獄もいっぱいでしたからね。だから私たちは下界に落とされたのです。神はこう思ったでしょう。『下界に落とせば天使の能力も無くなり、何も危害は加わらない』とね。しかし、無理やり下界に落としたものだから、大半の天使は能力を維持できました。『大天使』にいたっては悪魔の能力『魔能』も使えるようになりました」

「大・・天使」

「ああ、知らないですよねえ。大天使というのは天使を4段階で分けた中の2段階にあたる階級です。『神の5本指』を除けば、霊エネルギーをたくさん持っているのは『大天使』ということになります」

すから、全員下界に落とされました。私たちは決めたのです。天界に復讐する と。そして、『大天使』の一人、ペケルス・オーガ・クロスをリーダーにこういった組織を作りました。『デザスタ』。災害という意味です」

「天使流しつて、102年も前の話だろ。何で今頃活動しだした」

「活動できなかったのです。能力を維持できたといつても、下界で使えるようにするのに100年もの調整が必要だったのです。2年は出会いに使ってしまいました」

「でも、どうして復讐なんて」

「当たり前でしょ。憎む相手にはそれなりの恨みを晴らさなければいけません。それはこの世の鉄則です」

「そんな事しても空しいだけだろ」

「漫画みたいなことを言いますねえ。復讐するといつても神を倒すだけではありません。天界と下界を合体させるのです。そうすれば、人口増減なんて些細な問題は解決です」

「天界と下界を合体なんて本気が。そんな事したら世界が崩れるぞ」

「大丈夫です。そうならない方法があります」

「何だ、その方法ってのは」

「教えると思いますか」

「くそ、ならここにお前を倒す。行くぞ天使」

「貴方は『堕ちる』という言葉を知っていますか」

「何だそれ」

「人間の魂が天界から下界に落ちて霊になることが『堕ちる』って事です。そして、私たち天使も天界から落ちました。だから呼ぶならこう呼んでください。『堕天使^{だてんし}』とね。天使なんて汚れた名で俺を呼ぶな」

Σは、先ほどと同じように薄い緑色のエネルギー体で作った十字架の中心に手を当て、さっきと同じエネルギー波を石橋目掛けて発射した。

石橋は、先ほどと同じように日本刀でエネルギー波を吸収した。

「この技は、^{グラウンド・クロス}十字砲と言いまして、天使なら誰もが出来る技です」

「そうかい。それは良かったなあ。でも、俺に通じないんじゃない意味ねえぜ」

「ただエネルギーを吸収するだけの日本刀なら、限界まで吸収させてその日本刀の能力を壊すだけです」

「ただ吸収するだけだと。それはどうかな」

石橋が日本刀を前に突き出し突きをすると、薄い緑色のエネルギー波がΣ目掛けて発射された。エネルギー波は、扇をイメージするかのようにながっていった。

エネルギー波は、Σが居たところで爆発した。

「逃がしたか」

しかし、Σは天使の羽を広げ上空にいる。

「天使は汚れているとか言ってたくせに、そういう物は使うんだな」

「仕方が無いでしょう。天使や悪魔、堕天使にとって羽は霊エネルギーの集合体なんですよ。そして、この髪に入っているメッシュは天使だと白色、悪魔だと黒色、堕天使だと片方が白色でもう片方が黒色になっていて、それぞれの象徴となっています。それによく見てください。この羽は、半分が黒色になっている筈です。これが堕天使の印です」

「そんな事はどうでもいい。今は、お前たちの野望を阻止する。それが俺たち『除霊委員会』だ」

「はゝ。まったく、貴方を見てると内のリーダーの事を思い出します。本当に不愉快ですねえ。興奮フイールドめしました。戦闘は控えましょう。それに今はこつちらにとって戦場フィールドがよくないですし」

そう言うとき、どこかに飛んでいった。

「あつ、待てコノ野郎。降りて来い」

「ウルサイ」

後ろから射的の屋台の店主の男が現れた。

「こいつ、霊にとり憑かれてやがる。くそ、アノ野郎。ありがた迷惑なプレゼント置いてきやがって」

「があああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああ」

店主の男が走って来た。

「まずは、霊を体から出してやるぜ」

石橋は、持っている日本刀で男に峰打ちをした。男の体から黒い煙が出てきた。その煙が怪獣を思い出させるような形に変わっていく。

「悪いなあ。こっちは急いでるんだ。さっさと除霊させてもらうぜ」

石橋が霊を縦一文字に斬ると、霊は光となって消えていった。

「くそ、あいつをさっさと追いかけねえと。何所に行ったんだっけ。あゝもう。こっちだ」

石橋はΣと反対の方向に走っていった。

I - I X d o o r a d m i n i s t r a t i o n

5月23日午後8時36分

「委員長。電話鳴ってますよ」

木乃の指摘で、高森は自分の携帯電話が鳴っていることにきずいた。

「あ、くまからだ」

電話をかけてきたのは新井だった。高森が電話に出た瞬間に爆発音がした。

「おい、くま。どうした」

『委員長、その公園の噴水広場のから見えるは』

二回目の爆発音で、新井の言葉はかき消された。

「新井。何が起こってる」

新井が居る所が安全じゃないこと以外は、全く状況が掴めない高森。

「新井。聞こえるか。状況はどうなってやがる」

再度呼びかける高森だが、新井の声は返ってこない。そればかりか、爆発音だけが携帯ごしに聞こえる。

『ツー、ツー、ツー』

電話は切れた。新井の連絡はそれっきりだった。

「木乃。どうやら仕事ができちゃったようだ」

「マジですか。は、ついてない」

「悪いな。石橋が来たら、『仕事だ。さっさと噴水広場まで来い』、と伝えてくれ」

「「「分かりました」」」

3人が声をそろえて言った。

「よし。木乃、行くぞ」

「了解」

高森と木乃は、中央公園の噴水広場の方に走っていった。

5月23日午後8時40分

塩祖の電話が鳴った。

「もしもし。はい。はい。分かった」

塩祖は電話を切った。

「悪い。こっちも用事が出来た。行かせてもらっぜ」

「おい。待ってよ・・・って行っちゃったなあ」

今度は、飯田の電話が鳴った。

「もしもし。はい。分かりました、すぐに行きます」

飯田は電話を切った。

「ごめんね。私のほうも用事が出来ちゃった」

「はああ。何だよ。俺一人で石橋を待つのかよ」

飯田は「ごめんね」と言いながら、塩祖と反対の方向に走っていた。

「何だよ。みんな行っちゃったじゃねえか。あゝあ、石橋待つのも面倒臭えなあー」

「ミャ~~~~」

村雨は1人、ベンチに座りながら猫に向かって愚痴を吐いた。

5月23日午後8時43分

「ミャ~~~~」

猫が飼い主の少年の方に向かいながら鳴いた。

「・・・・・・・・・・」

少年は村雨を無言で見つめている。

「どうした。もしかして迷子か」

少年は首を横にブンブン振った。

「・・・・・・・・こっちに・・・・来て」

少年は指を差して言う。少年が指を差した方を見ると出口が見える。

「何だ、向こうに何か有るのか」

少年はコクンと頷いた。

「よし。行つてやるか」

村雨は少年について行つた。

【どうせ暇だし。子供の遊びだからな】

出口を通り、公園の外に出た。

「で、何があるんだ」

「・・・・・・・・・・死」

少年がその言葉を発した瞬間に木の陰から1人の女性が出て来た。

「なっ」

村雨はその言葉を発する以外のことが出来なかった。1人の女性は、村雨の腹部に右手の指5本を刺して笑っている。

「がっあああああああ」

グチュリ、という音が村雨の腹部から聞こえる。腹部からは真っ赤な血がにじみ出ている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

少年は村雨を無言で見つめている。

「まてえ」

その声と共に、全体が紫色の金槌のハンマーの部分少年に向かって飛んできた。

ガゴン

金槌が少年に当たる前に、1人の女性が一瞬にして間に入って金槌を止めた。

「特別除霊軍の上層部が探していた少年を今見つけました」

神田翔^{しょうじ}侍は、そう言つと携帯電話を切った。

「……誰」

「こう名乗れば良いかにや。『除霊委員会委員兼特別除霊軍第3部隊隊長』神田翔侍。お前さんの素性は大体分かつてるぜエイ。『堕天使』だろ」

「……………」

少年は無言で指を鳴らした。それが合図かのように、1人の女性が神田に向かって走り出した。

神田は、持っている金槌で相手の一撃を防いだ。金槌は1メートルぐらいの大きさだが、持つ部分は霊エネルギーを使って伸縮が可能になっている。これが神田の『お札』だ。

「なっ。お、お前『桐野楓』か」

その言葉に何の反応もなく、桐野楓はもう一方の手で神田の頭蓋骨を狙った。

「甘い」

神田は桐野楓の手をヒラリとかわし、金槌で桐野楓を思いつきり押した。桐野楓はバランスを崩し、少し仰け反った。その隙について神田は、持っている金槌を30センチぐらいにして、桐野楓を打った。

「くらえ。『釘打ち』」

神田がそう言うと、漫画で出てきそうな魔法陣のような陣が桐野楓

を打った金槌のハンマーの先端に形成された。そして、その陣が光りだした。

『釘打ち』とは、神田の所持する『お札』の金槌から霊エネルギーで作る陣を主体に、いろいろな効果を生み出すことが出来る技だ。

「ギャガギャギャアアアアアアアア」

桐野楓が不気味な悲鳴を上げて、遠くに吹き飛ばされた。

「な・・・・・・・・」

息を呑む音。しかし、その言葉を発したのは少年でも桐野楓でもなく神田だった。

「あれえ。一応『霊抜き』の陣だったはずだけど」

霊を除霊するには、人間の体から霊を取り除かなければならない。そうしなかった場合、霊と一緒に人間も消えてしまうからだ。

「ガアアアアアアアアア」

桐野楓は神田に向かってその辺に落ちていた石を投げた。

神田は、ヒラリとかわすと桐野楓に向かって走った。石は、神田の後ろにあった家の塀に当たった。家の塀は石の当たった所から波紋のように凹み、粉々に壊れた。

「言っとくけどなあ、俺の釘打ちがこの位だと思うなよ」

神田はさっきと同じような陣を作り、その陣を釘のような形に変えていった。

「おりゃああああ」

神田が叫ぶ。釘の形をした陣を桐野楓にぶつけた。桐野楓の体から黒い煙が出てきて、怪物の形をしていく。

「やっと出てきやがったか本体。じゃあ、早速除霊させてもらっぜ」
神田は桐野楓から出てきた霊に向かって『お札』の金槌を振り上げた。

「ガアアアアアアアアアアア」

霊は光となって消えていった。

「次はお前だ、堕天使」

「……」

堕天使の少年は無言で立っている。

「お前……嫌いだ」

「こっちこそ」

堕天使の少年は翼を出し、空に舞い上がる。

「おい、逃げるのかよ。くそ、降りてこいや」

神田は金槌の持つ部分を伸ばして、振り下ろした。

「釘打ち『滅』」

金槌の先端に赤色の陣が出てきた。先ほどの陣の色は黄色だったので、先ほどの陣と違うことが見た目で判断が出来る。

「・・・・・・・・」

墮天使の少年は、無言で黄緑色の霊エネルギーで作った十字架の中心の手のひらを置いて、神田目掛けて十字砲を放った。

「うわぁ。あの馬鹿やろう」

神田はすぐさま金槌を締め、十字砲を受け止めた。十字砲は、しばらく経つと消えて無くなった。

「逃げたか」

空には、先ほどの少年は居なくなっていた。

「まあ、いいか。俺の任務は終わったし」

そう言う神田は、ポケットから携帯電話を取り出して電話を掛けた。

「あ、もしもし。特別除霊軍上層部の鬼島きしまさんですか。神田です。任務を完了しました。『天への扉』は保護しました。ついでに、霊を1体除霊したので、憑依者の救助もお願いします」

『了解した。では、特別任務『除霊委員会監視』を続行してくれ』
そう言うと、鬼島という男は電話を切った。

神田へ向かって数台の車が走ってきて、神田の近くで止まった。

「神田さんですね、後は我々『特別所霊軍第4部隊』に任せてください」

車の中から出てきた男に向かって神田が言った。

「さすが第4部隊、クリムゾンスイーパー証拠隠滅部隊だ」

そう言うと、神田は中央公園の噴水広場に向かって走り出した。

「さてと・・・俺も戦場ステージに行きますぜエイ」

周りには、ボロボロになった屋台や木が撒き散らしてある。人も非難していて1人も周りには居ない。

そんな中を神田は、ひたすら走り続ける。

I - X angel people match

5月23日午後9時

高森と木乃は噴水広場に着いた。

「一応噴水広場に来たけど、さっきの避難放送で人っ子一人いないな」

「委員長、くまはその後何て言ってましたか」

「分からん。途中で電話が切れてしまったからな」

2人が話していると、噴水広場の木の陰から1人の男が出てきた。

「ようこそ。除霊委員のお二人さん」

「誰だ」

「自己紹介が遅れました。私の名は、ラオン・ネーゼル・シグマといます。先ほど私の分身を貴方達のお仲間の方に挨拶させに行きました。確か名前は、石橋とでもいったでしょうか」

「何、石橋と会っているのか」

「ええ、もの凄く不快になりました。もう少しこの場でお待ちください。全ての決着はその後付きます」

「ただ単に待っていると思う？あなたの正体は知らないけれどこの

事件に係わっているなら霊かなんかでしょうね。委員長、やりましよう」

木乃はそう言うと、手を後ろに回して腰のホルスターに入っている拳銃を取り出した。

「ああ、分かっている」

高森の右手に光が集まっていき、『槍』の形になっていく。

「まったく、人間の雌は野蛮ですね。でも良いでしょう。ここなら私の能力を使うことが出来る」

そう言うと、Σは噴水の近くに行き、水の中に手を入れた。

「我が能力は我を守るためにあり。我が能力は我の敵を倒すためにあり。我は流す、『アックア水の葬花銃』」

Σがそう言うと、噴水の水が回り始め渦潮を作っていく。そして、噴水の水が空へと巻き上げられてドリルのようなものが作られた。

「私の能力は水を操る能力だ」

さらに同じような水の竜巻が5本出来た。

「弾丸は装填した、後は引き金を引くだけです。どうしますか。大人しくしてくれれば何もしません」

「そついう訳にもいかないんだな」

高森の手には、矛先が橙色の槍が握られていた。

「委員長、さつさとあんなやつ倒しましょう」

木乃は、手に握っている拳銃に弾を装填した。

「仕方がないですねえ、死んでもらいましょう」

Σが指をパチンと鳴らすと同時に、水の竜巻が2本、高森と木乃に向かつて発射された。

「甘い」

高森は向かってきた水の竜巻を2本とも槍で横一文字に切り倒した。

「覚えておきな。私の『お札』の能力は自分自身の霊エネルギーを圧縮し、矛先から前方に打ち出す技、『砲撃槍』^{グレナード}だ」

高森が持っていた槍の矛先からオレンジ色の霊エネルギーが、真っ直ぐ、Σの方に発射された。

「甘いのはどっちですか。こんな直線的な攻撃が避けられないとも思いましたか」

Σは右に跳んで避けた。

「それは、あんだでしょ」

前方を見ると、木乃が片膝をついてΣを拳銃で狙っていた。

「『シルバー・ブラインド
朱銀の矢』」

拳銃の銃口を中心に5つの光る玉が星の形を作っていく。

「くそおおおお」

Σは残りの水の竜巻を木乃に向けて飛ばした。

しかし、水の竜巻はオレンジ色の光線によって全て斬られた。

「なにっ」

「直線上に竜巻を並べるなんて馬鹿じゃない」

「ナイス委員長」

銃口から赤色のエネルギー波がΣに向かって発射された。

「くそ、仕方が無いですねえ。茶番は終わりです。来い、オメガΩ」

エネルギー波とΣの間に少年が入ってきた。

「……………。我が能力は我を守るためにあり。我が能力は我の敵を倒すためにあり。我は喰らう、コメルボスケ餓狼餓鬼」

少年は両手を前に出した。手の平には3本の線が引いてあって、上に短い線が横に2本、下に手の端から端まで横に長い線が1本ある。

両手の短い2本の線が開き、その中から目玉が飛び出してきた。そして長い線が開き、その中から舌が出てきて口が出来た。その口が

エネルギー波を全て飲み込んだ。

「そんなの有るか」

「委員長、危ない」

Σが薄緑色の霊エネルギーで作った十字架で高森を狙っていた。

グラウンド・クロス
「十字砲」

薄緑色のエネルギー波が高森目掛けて発射された。

【体勢が悪い。避けきれない】

十字砲が高森に目掛けて飛んでいくのと同時に、高森達が通ってきた道から2人の影が現れた。

「危ねえ、委員長しやがめえええ」

高森と十字砲の間に石橋が入り込んだ。石橋の持っている日本刀が十字砲を吸い込んだ。

「大丈夫ですか、委員長」

続けて神田が高森の側に走ってきた。

「くそ、もう来たか。足止めはどうしたんです」

「足止め？あの親父のことか。あんなの弱すぎて除霊しちまったぜ」

「違う、桐野楓だ」

「はっ、何だそいつは」

「……。おい、Ω。まさかお前」

「…….…….ごめん」

「は、しょうがねえ。Ω、^{シンヤー}山をするぞ」

「させるかあ」

木乃がΣとΩを狙って3発撃った。しかし、2人は堕天使の翼を広げて空へ飛んだ。

「何あれ。あの翼って、まさかあいつら天使」

「違いますにや。あいつらは堕天使。まあ、詳しいことは後ほど話しますぜエイ」

「いくぞ、Ω」

「…….…….」

Ωは、先ほど手の平の口で飲み込んだエネルギーを丸めて野球ボールぐらいの大きさの玉を作った。それを、ちょうど真下に投げ爆発を起こし砂埃を巻き上げた。

「くそ、何にも見えねえ」

「皆、なるべくかたまっておくにや〜」

「おい石橋、木乃は」

「えっ、知りませんけど。神田は知ってるか」

「知らないにや〜」

石橋たちが固まっていると、前方から光が見えた。

「石橋、日本刀構えろ」

「はああ」

石橋が光の方を見ながら返事をしていると、前方から赤色のエネルギー波が飛んできた。

「木乃、あいつッ」

神田は、赤色のエネルギー波を日本刀で吸い込んだ。その時に起きた爆風で、舞っていた砂埃が辺りに吹き飛んだ。

「木乃、てんめええ、殺す気か」

「あんたの能力があるから大丈夫でしょ。それより、あいつら何所に行った」

辺りを見ると、ΣとΩの姿が消えていた。

「おい皆。下を見る」

高森の言葉で石橋たちは下を一斉に見た。そこには、この噴水広場を覆うように陣が地面に書かれていた。

「な、何だこれ。魔方陣か何かか」

『違いますよ。魔方陣なんかじゃありません。やっぱり、貴方の頭は空っぽですねえ。もっとたちの悪い物ですよ』

「はあ、ふざけんな。何所に居る」

「頭空っぽなのは本当だけどねえ」

「うるせえ、木乃」

「こんな時も喧嘩するな」

『喧嘩もその位にしておいてくださいね』

「誰がこんなやつと喧嘩なんかするかよ」

「ふざけんなよ石橋。あれ、神田は」

木乃が気づいた時には、神田はこの場から居なくなっていた。

『それでは皆さん』

その声と共に、地面に書いてある陣が光りだした。

『楽しい楽しい、殺し合^{バトル}いの始まりですよ』

陣が光だし、噴水広場を覆うように結界が出来た。

『一方的のね・・・』

5月23日午後9時14分

「絶対、どこかにあの陣を作っているヤツがいるはずにやゝ。そいつを探すまで耐えてて下さいにやゝ、皆」

携帯が鳴っているのにも気づかずに、神田は真っ暗な茂みの中を走っている。

5月23日午後9時15分

場所は特別除霊軍本部。特別除霊軍本部は、小波町の隣の町の円^{まるだ}形町の中心街に建っているセンタービルにある。

「神田のやつ、電話鳴ってるのに気づいてねえのかあ」

「緊急の用事ですか。だったら私が行ってきましようか」

「それは駄目だ。秘書が居なくなったら困るだろ、木津^{きじ}」

「分かりました。では、今夜はゆっくりお休みください、塩^{しほ}祖様」

「ああ、お休み」

木津は扉をガチャンと閉めた。

しばらくすると、塩祖の携帯に電話が掛かってきた。

「もしもし、塩祖です」

『鬼島だ』

「どうしたんですか。特別除霊軍上層部のお偉いかたが、こんな只の高校生に電話してきて」

『何を言ってるんだ。君は特別除霊軍総隊長でありながら特別除霊軍最高司令官だろ』

「分かってますよ。少し遊んだだけです。で、用件は何ですか」

『最優先事項の『天への扉』の保護に成功した。後は、『バスアドミッションリング 指輪』と『天からの鍵』だけだな』

「いいや、違うぞ。『天からの鍵』は、もう保護してある。何せよ、特別除霊軍の隊員だったからな」

『そのことを聞いたのは、今が初めてなんだが』

「そうだったつけ。まあ、そこら辺は内の秘書に任せてあるから。用件はこれで終わるか」

『ああ。そういえば、『天神の子』のことはどうなっている』

「悪い。そこら辺はパスだ。もう切らせてもらっぞ」

『ああ、すまなかった。また何かあったら電話する』

「次にお前から掛かってくる電話が良い知らせだということを願うよ」

塩祖は電話を切った。

「『天神の子』か……。石を見つけるみたいに簡単に見つかるなら、『世界を救う存在』とか言われたりしないぜ」

塩祖は窓から見える空を見ながらため息を吐いた。

I - X I t e a m d i s a s t e r

5月23日午後8時33分

「くそ、あいつら以外に手強かつたなあ」

新井は倒れた男達を見ながら呟いた。

霊に取り憑かれていた男達は皆死んでいた。

「死んだ人に取り憑く事なんてありえないのに・・・」

「それはなあ霊も人と同じように、進化するからなんだよ!!」

新井は振り向いた。そこには、黒色と白色の羽で飛んでいるメガネを掛けた男がいた。

「その翼・・・まさかお前、天使か」

「違うな。俺達は、堕天使って言うんだよ。ちなみに、俺の名前は、ペケルス・オーガ・クロスっていうんだ、^{ペケ}×とでも呼んでくれ、除霊委員」

「堕天使・・・いや、それ以前に『達』って事は、お前以外にもその堕天使ってのがいるのか」

「ご名答。今は、中央公園の噴水広場から見える廃墟にいるなあ。だが、お前がそんな事を知ったってお前には何も出来ない。何故なら、ここで死ぬからなあ」

×が後ろから6発のリボルバー型の銃を取り出し、新井目掛けて撃った。弾の色は紫色をしている。

「うわぁ」

新井は右に転がり避けた。弾は地面に当たり、小さな爆発が起きた。

「とりあえず、委員長に電話だ」

新井は電話を取り出し高森に掛けた。

『おい、くま。どうした』

「委員長、その公園の噴水広場から見えるは」

新井が電話に夢中になっていると、新井目掛けて弾が飛んできた。

「しまった、くそっ」

新井は間一髪避けたが、携帯はどこかに飛んでいつてしまった。この大量の弾の雨の中じゃ、無事にいるはずが無い。新井は携帯を探すことを諦め、避けることに集中した。

「オラオラ、テキパキ避けないと死ぬぞ」

×は何発も弾を連射してきた。

「おいおい、6発しか弾入ってないだろ」

「弾かぁ・・・弾ねえ・・・。そんな物、俺の能力で無限に作れるぜ」

「の・・・能力」

「そうだ。俺の能力は『れいそうたん霊装弾』。自分の霊エネルギーや空気中に漂っている霊エネルギー、さらには相手の霊エネルギーを使って弾を何発でも作ることが出来るんだ。そして、この銃は俺の能力専用の銃で、名前は『ヴォルガノス禁金武』っていうんだ。どうだ、冥土の土産には丁度良いだろ」

「冥土の土産だぁ。誰が死ぬかよ」

新井はそう言うと、左手をグーにし後ろに持っていき、右手をパーにして×の方に向けた。

「何の真似だ。そのまま死にたいのか」

「うるせえ、見てろよ」

新井の右手に十字に入っている白いラインに白い光が集まっていく。

「ちつ、何かされる前に殺すか」

×は禁金武から弾を撃った。

「れいほう零砲」

新井がそう言うと、右手に集まっていた白い光が×目掛けて発射された。

「なつ、糞野郎・・・」

×は横に禁金金武を撃ち、零砲を避けた。

「何だお前、そんな事も出来るのか。少し見直したぜ」

「顔が全然そうには見えないけどな」

「しかし、その技があれに似てるな・・・」

「は？あれって何だよ」

「これだよ」

×は紫色の霊エネルギーで十字架を作って、新井に向けた。

十字架に出来た霊エネルギーの真ん中からエネルギー波が出た。

「おい、なんだそりゃ」

新井は零砲を撃った。2つのエネルギー波は相殺されて、消えていった。

「今のはなあ、グラウンド・クロス十字砲っていうやつだ。そして、お前の零砲ってのがこれに似てるんだよ」

「知ったこっちゃねえんだよ、そんな事。これはな、この『お札』を手に入れた時から勝手に使えた技なんだよ」

「どっちでも良いや、お前だってそうだろ、そんな事なんだから」

「テメーが最初に変なこと言ってきたんじゃないか。しかし、なんでその堕天使とやらが俺を襲ってきたりしてんだよ。ってか、それ以外にいろいろ疑問があるんだけど」

「そうだ。そこなんだよ、本題はなあ。俺達は、^{シクマ}Σという中途半端マジメ野郎と^{オメガ}Ωという無口食いしん坊野郎と一緒に『デザスタ』っていう組織を作ったんだ」

「組織だと。また、何のために」

「何のためにか・・・、強いて言うなら革命のためにだな」

「革命だと・・・」

「そう、レボリユーションだよレボリユーション」

「何にだ。何にたいしてだ」

「もちろん、『天界』にだ」

「なっ・・・、天界だと・・・」

「そうだ。そこで、入らないか。デザスタに。一緒に変えないか、世界を・・・全てを」

「ふざけるな、テメー。誰がそんな事させるかよ」

「そうか。そうだよなあ。超霊媒体質のやつなら分かんと思ったん

だがな。やっぱり所詮はあの糞神に作られた人間ガラクタだからなあああ」

×は金色の霊エネルギーで作った十字架からエネルギー波を出した。

「またそれかよ」

新井は、零砲を撃った。

「くはははは。そのまま死んじまえ」

零砲は金色のエネルギー波に当たると、周りに飛び散った。

「な・・なに」

そして、金色のエネルギー波は新井に当たった。

「ふはは、今のは十字砲じゃねぞ。大天使だけが使える技、グラウンド『滅殺・クロス・グレイブ十字砲』だ。この技は、十字砲の大よそ10倍の威力。お前の零砲とか言うやつは十字砲と同じ威力だからな、力負けはしねえ」

砂埃が舞う。

「死んだか・・・」

×はその場を立ち去ろうとした。

「あゝあ、最悪だ。せつかく舞が持ってきてくれた新しい服がボロボロじゃねえか」

新井は立ち上がる。

「立ち上がってこなければ良いものを、そんなに死にたいか」

×が禁金金武を構える。

「別に死にたくは無いな……まあ、どの道勝てねえからな」

新井が零砲を構える。

「わりーが、逃げさせてもらうぜ」

新井は零砲を真下に放った。砂埃が再び舞う。

エンジェルリング
「高速移動輪」

少ししてから砂埃が消える。新井の姿はそこには無かった。

「くそ、逃げられた。しかし、あの傷で俺から逃げるとはな」

「あいつらの所にもいくか」

×は墮天使の翼を広げた。そして、夜の空を飛んでいった。

5月23日午後8時42分

「はあ……はあ……。高速移動輪が無かったら死んでたな」

高速移動輪とは、輪を空中に作り、その中を通過したものは3秒間

だけ高速移動することができる。

「とりあえず、皆と合流しないとな」

新井は立つ。そして、夜の道を歩いていった。

I - X I I t w i n f a l l a n g e l

5月23日午後9時16分

「おい、木乃、委員長。2人ともどこ行っただ」

石橋は閉じ込められた結界の中を歩いていた。辺りには何もなく、真っ白だ。永遠に白い景色が続いている。

「くっそ、何だこの空間。気味悪いぜ」

「そんなことは無いでしょ。白から作り出す世界って感じで、良いじゃないですか」

石橋の目の前に、突然Σが現れた。手には、水が入ったペットボトルが握られている。

「またお前かよ」

「おや？私じゃ駄目かな」

「いいや、ちょうどリベンジしたいと思ってたところだからな」

石橋は先ほど木乃から受けたエネルギー波を剣先から飛ばそうとした。しかし、剣は構えたが、肝心のエネルギー波は出なかった。

「な、なんだこりゃ」

「言っただでしょう、一方的の殺し合^{バトル}いだって」

Σは墮天使の翼を広げ、石橋の方に飛んで行った。そして、その勢いのまま石橋に重い拳をぶつけた。

「ぐあああ
」

石橋は後ろに飛ばされた。

「この戦場は、超霊媒体質を無効化する能力があるんです。しかし、^{フィールド}超霊媒体質の人間は、その能力さえ奪ってしまえば脆いものだと思っていたのですが……案外、基礎体力もしっかりしているんですね」

「当たり前だ。これ位の攻撃で、倒れるかよ」

石橋は立ち上がり、日本刀を構え直した。

「しかし、能力を封じられて、どう私を倒す気ですか。この結界は天使の能力を上げる効果もあるんですよ」

「そうか」

石橋は日本刀を鞘に納めた。

「そうか。だったらこれで、おあいこさまだ」

「何をする気だ、貴様」

石橋は右目を左手で隠した。

「しんくがん
神紅眼」

石橋は左手を下に振り下ろした。そして、右目が赤く染まっていく。

5月23日午後9時20分

「……」

Ωは無言のまま、山（シシャー）を作っている結界陣を見張っていた。

「ここにあつたのかにや」。この陣を壊せばあの結界は無くなるんだな、墮天使」

結界の方から神田が歩いてきた。手には『お札』の金槌が握られている。

「……………またお前か」

Ωの手の平にある口が開き、舌が出てきた。

「我は喰らう、コメルボスケ
餓狼餓鬼」

「今の言葉、お前の能力の発動呪文的なやつか」

神田が話していると、Ωがグラウンド・クロス十字砲を放った。

「容赦ねーな。だったら、こっちも攻撃させてもらっぜ」

金槌のハンマー部分が大きくなっていく。そして、神田は金槌を振り下ろした。

「おらよ」

Ωは後ろに跳んで金槌を避けた。振り下ろされたハンマー部分は地面に当たり、そこから周辺にクレーターが出来た。

「逃げて良いのか。あの陣を打ち壊しちまうぜ」

「……駄目に……。決まって……。いる」

Ωは墮天使の翼を広げ、神田の方に猛スピードで突っ込んだ。

「喋んのは遅いくせに、動きはメツチャ速えじゃねーかよ」

神田は、金槌の大きさを元に戻した。

「ここからは、俺も本気だ」

神田の前に大きな陣が出現した。その陣を神田は持っている金槌で叩いた。陣は形を変え、エネルギー波になってΩの方に飛んでいた。

Ωは右手の口を前に突き出して、エネルギー波を喰わせた。

「くそつ。あの口は厄介だな。先にこの陣を壊させてもらうか」

神田は、釘打ち『陣壊し』の陣を纏った金槌を結界を作っている陣

に向かつて振り下ろした。Ωは、神田が陣を壊そうとしたのが見え
たが、距離があつて間に合わない。

「こいつで終わりだ」

「余計なことすんなよ、除霊委員会の奴」

神田の持っていた金槌が撃たれ、遠くの方に転がっていった。

「おいおい、何てこつた」

神田が見上げる先には、銃を片手に堕天使の翼で飛んでいる^{ペケ}×の姿
があつた。

「・・・×さん・・・気になる奴とは・・・会えましたか」

「ああ、会つてきた。実にムカツク奴だったよ。名前は・・・たし
か新井修太とか言つたな」

「新井に会つたのか。あいつは今どこだ」

「知らねーよ。逃げられたからな。だけど傷も深そうだったからな
あ・・・死んだんじゃないか」

「そうか、新井は無事か」

「おい。俺の話聞いてたか」

「ああ、聞いてたさ」

神田は、落ちている金槌を拾った。

「逃げ切れたならあいつは助かる」

「根拠はあんのか」

「あいつはそういう奴なんだよ」

神田は、金槌を構えた。

「さてと・・・さつさとあの陣を壊すか」

×はΩの近くに降りてきた。

「Ω、一緒にあいつを^{なぶ}斃り殺すか」

「・・・命令ならば」

「よし、これは命令だ。あいつを殺すぞ」

×は^{ヴォルガノス}禁金金武を構え、神田目掛けて撃った。そして銃声だけがそこには響いた。

I - XIII end first episode

5月23日午後9時23分

山の中では、空のペットボトルをもった^{シグマ}と倒れている石橋がいた。^{シヤ}

「あゝあ、もう水が無くなっちゃいましたか。ところで、その目は
いったい何なんですか。この中でも使えるなんて・・・超霊媒体質
の能力じゃないようですね」

石橋は立ち上がり答える。体中ボロボロで、右目からは血の涙が垂
れている。

「何でもねーよ。昔に、ちょっと知り合いから貰ったもんだ」

「知り合いですか。よほど親切な人でしょうね、自分の目を渡すな
んて」

Σは地面に散らばった水を球体状にして掴んだ。

「そんな厄介な目は、早めに潰しておきましょう」

Σが持っている球体状の水から、石橋に向かって一直線に棘のよう
なものが弾丸のスピードで伸びていった。

キン

しかし、石橋はいとも簡単に日本刀で防いだ。

「やっぱり。私の攻撃が見えるんですね。さっきの水弾攻撃も当たったのが10発中4発。本来なら、全弾当たってるはずなんですがね」

「よく言っぜ。これでも1発避けるのに精一杯だったんだぞ。それに、1発の威力だつて半端じゃねー」

「しかし、そうなるとうやうて殺そうか迷いますね。．．．そうだ。下界にはこういう言葉がありましたねえ。『下手な鉄砲も数打てば当たる』。良い言葉ですねえ」

その周りに散らばっていた水が宙に浮き、1ミリほどの弾になっていく。

「ふざけんなよ、あの野郎」

石橋は苦笑いしながらも日本刀を構える。右目からはまだ血の涙が垂れている。

5月23日午後9時23分

鳴り響いていた銃声が止んだ。

「あぶねえな。俺がいない間に結構やばい状況になってるじゃねえか。最悪だ。でも、バッドエンドじゃ終わらせねえぞ」

「．．．．×様。あいつは．．．」

神田の前には、×が撃った弾丸を弾き飛ばした新井が立っていた。

「ああ、Ω。あいつが俺の言った新井ってやつだ。しかし、生きていたとしてもここに来るとはなあ」

「ふざけんな。あんなでつかい結界があれば、誰でもここに来るだろ」

「なるほど」

×は関心したように言った。

「いやー、助かった。正直、さっきの弾は避けなかった」

「おう。ところで神田、あの結界は何だ」

「何かは知らないが、あの中に委員長達がいることは言える」

「で、あの結界を作っているのがそこにある陣って訳か」

「そうだ。正し、お前らにはこの陣は壊せない」

×が結界を作っている陣のそばまで行き、墮天使の羽を広げていた。

「神田。ここはさっさと陣を破壊した方がいいな」

「同感だ」

神田は賛同すると、金槌を構えた。新井もグローブを付け直している。

「Ω、やるぞ」

×は禁金金武から10発の弾丸を撃った。新井と神田は、右と左にそれぞれ避けた。

「新井、後は任せたぞ」

そう言うと、Ωに突撃し、陣から遠ざけていった。

「あらら、行っちゃった」

神田とΩの方を見て×が呟く。

「よそ見してんじゃねーよ」

新井は×に零砲を撃った。×はそれを飛んで避けた。

「おいおい、避けていいのかよ。陣を壊しちゃうぞ」

「心配ご無用」

×は禁金金武を新井に向けて撃った。

「馬鹿か。俺はもう陣の上だぞ。このまま避けて、地面が抉^{えく}れれば陣が壊れるだろ」

新井は避け、弾は陣に当たり爆発した。しかし、陣には傷一つ付かず、地面も抉^{えく}れていなかった。

「陣を構成しているところが簡単に破壊されると思うなよ。なあ、もう一度聞くぞ。俺達の仲間にならないか」

「何度も言わせるな。断る」

「そうか。なら、お前もこの言葉を俺に何度も言わせるな。死ねえええ」

×は新井に向けて5発の弾丸を撃った。

「言つたろ、バットエンドじゃ終わらせねえってな」

新井は、自分の右側に×へ向かうように弧を描いて高速移動輪エンジェルリングを出した。そしてその輪に入ると、あつという間に×の所にまで行った。

「よつ。やつとお前を殴れるぜ」

新井の拳は×の左頬を捉え、そのまま地面に叩きつけるように殴り飛ばした。そして飛ばされた×は近くにあった木にぶつかった。

「ううう、痛いねえ。まさか殴り飛ばされるとは。だけど、空中じや身動きがとれないよなあ」

×は十字砲を新井に向けて放った。グラウンド・クロス十字砲は新井に直撃した。

「どうだ新井。直に当たると結構痛いもんだろ」

「ああ、痛え。だけど、やることはやったしな」

新井は落下しながら言った。

「何だと」

新井は神田と戦っているΩに向けて零砲を放った。Ωからは死角で見えていない。

「Ω、後ろだ」

×の言葉に即座に反応し、Ωは両手の口で零砲を喰らった。その隙を付いて、神田は陣へ向けて走った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「やつとか、新井。ちょっと苦戦でもしたかニヤ」

神田は陣のそばまで行き金槌を振り下ろした。金槌は陣に当たり、陣はパズルの欠片かけらのような物となって消え、それと同時に結界も粉々になったガラスのように消えていった。

「チツ。折角作った陣が跡形もなく壊されちゃったか」

「悪いな×。俺は陣つてもものの壊し方なんか知らねえんだ。だから、俺はお前ら二人の足止め役だったってことだ」

新井が神田の所まで歩きながら言う。

「そつ、だから新井に『任せた』って言ったんだニヤ」

「そついうことか。仕方ない、こんなに時間が経つちまったら特別除霊軍のやつらも来るしな。一旦引くとするか。おいΩ、Σを呼ん

で来い」

「・・・はい」

Ωは墮天使の翼で飛んでいった。

「と、いうことで、こちら辺でこのゲームは一時停止ということじゃあな」

×は新井達に向けて1発撃った。しかし、その弾は途中で大量の煙となった。煙が晴れるころには、×の姿はどこにも無かった。

「くそ、逃がした」

新井の言葉が虚しく響く。

5月23日午後9時26分

「何だこれは。いったいどうしたのだ」

消えていく結界を見ながらΣは呟く。

「はは、神田か誰かがやってくれたな」

「ぐうう、仕方が無い。お前だけでも殺しておくか」

Σは石橋に向けて十字砲を構えた。

「さて」

しかしそこに、木乃と高森が来た。木乃は何発かΣに向けて銃を撃っている。

「またしても邪魔が入るか」

Σは弾を後ろに跳び避けた。そこにΩが来た。

「何ですか、Ω」

「……一時撤退らしい」

「そうですか。まったく、うちのリーダーは我がままですね。というところなので、私達は帰らせてもらいます」

ΣとΩは堕天使の翼を広げ飛んでいった。

「大丈夫か、石橋」

木乃が石橋の方に駆け寄ってきた。

「ああ、大丈夫、大丈夫」

「大丈夫なわけないだろ。委員長、医療班に電話を」

「その必要は無いニヤ」

新井と神田が噴水広場に戻ってきた。

「医療班には俺が連絡してきましたゼエ」

「そうか。ところでお前ら、墮天使について詳しく話してくれ」

「ああ、分かってるって委員長。でも、もう医療班も来たから、また後でということだ」

そして、医療班の隊員達が除霊委員に話しかける。

5月23日午後10時

「まったく、×。結局何も収穫は無しだし、完全に無駄骨だったろうが」

「そう言っなよ、Σ」

「そういえば、ヨーロッパの方で墮天使の目撃情報があったとか」

「……誰だそいつは」

「情報によれば、黒髪で左側にメッシュが入っていて、色は白色だとか」

「黒髪か……天使の象徴である白い輪の半分が黒色になったから、左側だけ白色に見えるんだな」

「多分そうでしょうね。で、心当たりはあるんですか」

「ああ、俺と同じ大天使の第三席、名前はイララム・カップ・ノイラーだったかな」

「ちなみに、×さんは第何席でしたっけ」

「・・・・・・第五席だよ。てか、席の順番は強さに何の関係もないだろ」

「分かってますよ。ふふ・・じゃあ、これからどうします」

「そうだな・・久しぶりに大天使に会ってくるか。じゃっ、留守番よろしく」

「まったく。分かりました。せいぜい殺されないよう気をつけてくださいね」

「ああ」

そう言うと、×は墮天使の翼を広げ飛んでいった。

I - X I I I e n d f i r s t e p i s o d e (後書き)

あとがきもどき

いろいろありまして、やっとエピソード1終了です。最後のI - X I I Iは、話を詰め込みすぎた感じがします。

まあ、自分的に14で終わるよりは13で終わりたかったのが本音です。

これからもボチボチがんばっていくので、感想や評価のほうもよろしく願います。

長い文章を読んだのに、また文章があつてすみませんでした。

エピソード2はヨーロッパが舞台か・・・ヨーロッパなんて全然知らん・・・・・・・・

II - I Move story

6月22日午後4時

「もう後3日で期末考査だな」

新井が神田と亜美に言う。

「そういえばもうすぐだニヤ」。全然勉強なんてしてなかったです
たい」

「お前は勉強なんてしなくても赤点なんて取らないから良いけど、
私と新井はマジでやばいからな」

「いや、そんなこと自慢するな。てか、俺を入れるな」

「いや新井、お前は基本数学しか出来ねーだろ」

「ぐっ」

「数学は小学校から天才的に凄いのに、国語や英語は全然駄目。壊
滅的だ。それに数学が出来るなら理科だつて出来るかと聞かれたら、
そうでもないだろ」

「数学が天才的ってのは分かるニヤ」。俺は新井に一回も点数で勝
つたことが無いしニヤ」

「・・・うるせえ」

「じゃあ、明日皆で勉強でもするか」

「賛成だニヤ」

「新井はどうする」

「分かりましたよ。行きます行きます！」

「あ、拗ねた」

「拗ねたニヤ」

6月22日午後6時17分

「新井、電話が鳴ってるゼヨ」

神田が寮に置いてある電話を指差しながら言った。

「すまん、今手が離せそうに無い。代わりに出てくれ」

「しょうがないニヤ」。もしも、どちら様ですか」

「あれ、何でお前が出るんだ」

電話の相手は高森だった。

「まあ、お邪魔してるということですか。どうしたんですかニヤ」

「ああ。何か新井に来てほしいだとさ」

「誰がニヤ」

「特別除霊軍のお偉いさまがただとよ」

6月22日午後7時40分

「ここが特別除霊軍本部か。初めて来たな」

新井は高く聳^{そび}え立ったビルを見ながら言った。

「何で俺まで付いて来なくちゃならないかニヤ」

「場所が分からなかったんだよ。良いだろこれくらい。俺の部屋で飯食ったんだし」

自動ドアが開き、新井たちはビルの中に入ってしまった。

6月22日午後7時43分

「ここがお偉いさまの部屋ねえ」

新井と神田は最上階のとあるドアの前に立っていた。両サイドには、ロビーから付き添いとしてボディーガードの男が2人立っていた。

コンコン

「失礼します」

右側のボディーガードの男がドアを叩き、そう言った。

「ああ、入れ」

中から声が聞こえ、右側のボディーガードがドアを開けた。

「やっと来たか。．．あれ。神田、お前も来たのか」

ドアを開けて入ると、広い空間の中央にテーブルと3人掛けのソファ12つがあり、そこに2人の男が座っていた。

「お前は．．．」

新井から見て右側のソファーには塩祖流斗しおぞりゅうとが座っていて、反対側のソファーには膨ふくれっ面の石橋が座っていた。

「こんばんは、塩祖さん」

神田はお辞儀をしながら言う。

「え、神田．．．何、どういこと」

「まあ、とりあえず座ってくれ」

塩祖に言われるまま、新井と神田は石橋の方のソファーに座った。

「で、何から聞きたい。新井君」

「とりあえず、何でここに呼び出したんですか」

その質問に塩祖は驚いた顔をした。

「何故俺がここにいてっていうのは聞かないのかい」

「聞くまでもないですよ。今ある情報を整理すると、あなたは特別除霊軍の幹部で、神田はそのことを知っていた。そして、そのことを聞かされた石橋さんは拗ねているってことですね」

「拗ねてねえ」

石橋はすぐさま反論した。

「90%正解かな。特別除霊軍の幹部じゃなくて、最高準総司令官」

「最高準総司令官って、この特別所霊軍のトップの最高総司令官の次ですかっ!!」

「うん。そうだよ」

塩祖は石橋を見ながら言った。石橋は塩祖を睨みつけている。

「いや、質問が少ないと助かる。石橋からは、質問攻めだったからなあ。で、何でここに呼び出したからって質問だったな。もちろん任務のためだよ」

「任務って何の任務ですか」

「一言で言うと、ヨーロッパの特別除霊軍本部からのSOSってわけだよ」

「すみません。話の内容が理解できないんですが」

「詳しく言うのだ、『イタリアのグラッパってところで天使の目撃情報があつて、実際に被害も出ている』。つまり、天使との戦闘経験がある新井君と石橋に、イタリアに行って調査および天使撃退をお願いしたいってことだよ」

「何で俺と石橋さんなんですか。神田や委員長、木乃さんも呼べばよかったじゃないですか」

「いやいや、大人数で行くと何かと危険がある。それに、木乃や高森は君達ほど天使と戦ちゃいない。神田はいなくなるとこちらに色々と不備がある」

「だから、2人で行けというんですね」

「大丈夫だよ。第三部隊の隊員を2人くらい行かせてあるから。あ、勝手に隊員使つて悪いな、神田」

「そんなことはありませんよ」

神田が答える。

「おい神田。どういうことだ。コイツから聞いたぞ。お前が特別除霊軍第三部隊隊長だつてことを・・・なぜ隠してた」

石橋は神田に向けて言った。

「一応、このことは極秘情報です。ですからニヤ。まあ、新井には教えてたけど」

石橋は無表情のままソファから立ち会った。

「では、行きましょうか」

塩祖も立ち上がる。

「どこにですか」

新井と神田もそれにつられて立ち上がる。

「屋上にさ」

6月22日午後7時52分

屋上には一機の飛行機が止まっていた。

「これでイタリアまで飛んでほしい」

「この戦闘機にのつてですか」

新井は少し身を構えながら言った。

「塩祖。この任務が終わったら、1つだけ俺の言うことを聞け」

「分かってます。それでは乗ってください」

「おい神田」

新井が神田を呼ぶ。

「何かニヤ」

新井はそばに來た神田を殴り飛ばした。そして、神田の胸座を掴んだ。
むなぐら

「あの時約束したよな。これからは何もかも秘密は無しにしようって」

「ああ、・・・約束したな」

「なのに何故、最高準總司令官のことを話さなかった!」

「そのことについては悪いと思っている」

「ほかに何か、黙っていることがあるんだろ」

「・・・・・・・・」

「神田、この任務が終わったら、黙っていることを全部俺に話せ」

「・・・・・・・・分かった」

新井は神田の胸座を離した。

「あ、そうだ。明日亜美達と勉強会するんだったな。……………
神田。明日は上手いこと言っといてくれ。良いだろそれくらい。今
まで俺の部屋で飯食ってきてるんだから」

「ああ、多分そのことは頼まれるだろうと思ってたよ。分かっ
てる」

新井は戦闘機に乗った。石橋はいつのまにかもう乗り込んでいた。

「最悪だ」

「全くだな。新井、神田を殴つといてくれてありがとな。お前がや
らなかったら俺がやってた」

「それは洒落にならなかったでしょうね」

「それでは離陸しますので、しっかりとシートベルト等の確認をお
願います」

パイロットの男はそれだけ言うと、操縦席に座った。そして飛行機
は、少しずつ滑走路を移動し、そして空へと飛んでいった。

6月22日午後7時57分

「お前も色々大変だなあ、神田」

「ええ、そうでしょうね。あなたのせいでね」

神田は殴られた頬を摩りながら言った。

「さて、明日は亜美に何て言おうか……」

II・I Move story (後書き)

まえがきもどき ー スペシャル ー

エピソード2の冒頭を書いてみました。

ちよつと黒かったですね、この話。自分はそんなこと無いかなー
とは思ってるんですが・・・。

さて、イタリアの町の名前で『グラッパ』ってのが出ましたが、実際にありません(たぶん)。書いているときにパツと聞いたのがグラッパ、意味など無いグラッパ。なんでグラッパにしたんだろぅ・・・。

ではでは、評価や感想のほうを待っていますので、ぼちぼちよろしくお願いします。

まえがきもどきは初めてなのに『スペシャル』って、どこらへんが？

II - II die time

6月22日午後10時17分

「うえええ、酔った・・・」

新井は新鮮な空気を吸いながら言った。

イタリアには、本来なら約13時間から15時間ぐらいの時間が掛かるが、この戦闘機は約10時間という時間でイタリアまで飛んだのだ。現在の技術には、霊エネルギーを使った技術が研究されており、この戦闘機もその技術を応用した物である。

「お待ちしておりました」

新井たちの目の前には美少女が立っていた。見た目から考えるとハーフで、年は14歳ぐらい、髪は金髪で瞳の色は澄んだ緑色をしている。

「君は誰だ」

俺の質問に対して、その少女ではなく石橋が答えてきた。

「塩祖から貰った資料によると、名前は小林ルニーナ。イタリア人と日本人のハーフで、今回は戦闘はもちろん、通訳として派遣されたい」

「へえ」

「これによるともう一人いるらしいが、どこにいるか分からないか
ルニーナちゃん」

【初対面の人にいきなりちゃんずけとか、さすが誰もが認める女誑たらし】

新井が心の中でそんな事を考えていると返事が返ってきた。

「いいえ。多分、この建物の中に居ると思われます」

「そういえば、この建物は何なんですかルニーナさん」

「この建物はイタリアの特別除霊軍本部です」

「ここがねえ。よし、じゃあもう中に入るか。案内頼むよ、ルニーナちゃん」

「はい」

6月22日午後10時25分

新井たちはイタリアの特別除霊軍最高総司令官の部屋に入った。そこには、50歳後半の男性がいた。

「いやいや、待ちわびていましたよ」

最高総司令官の男が新井たちに話しかけてきた。もちろんイタリア語である。新井たちは、ソファアに座るよう勧められ、それに従っ

た。

「では、今イタリアで起こっている事についての情報をください」

新井たちは、ルニーナに通訳してもらい大体の状況を掴んだ

「なるほど。つまり、突然現れた天使によってイタリアの特別除霊軍の人達が殺されていると。それで、力を貸してほしいという訳ですか」

ルニーナに通訳してもらう。

「そういうことです。どうか力を貸してください」

またルニーナに通訳してもらう。

「もちろんです」

6月22日午後11時14分

「あれから入国審査やらなんやらで疲れたぜ」

「何言ってるんですか、石橋さんが道に迷ったりするからです」

「しょうがないだろ、この中結構広かったんだから」

「そうですね。さて、これからどうしますか」

「今日はもう遅いからな・・ホテルも取ってあるみたいだし、そっちに行くか。ルニーナちゃん、また案内頼むよ」

「分かりました」

6月23日午前0時

グラッパには、町の象徴として中央に聳え立つ時計塔がある。その時計塔の屋根の上には女神の像が建てられていて、その横に一人の男がいた。

「やっと来たな。あいつの言ってた通りか」

顔はフードを深く被っているので見えない。しかし、背中から墮天使の翼が出ている。

「あの野郎は気に入らねえが、神も人間も気に入らないからなあ。仕方ない、あいつの命令通り今日来た奴らも殺すか」

暗い闇の中、その男は不気味にに笑う。

「絶命タイムだ!!!」

II - III moment rest

6月23日午前5時58分

朝の光を浴び、新井は目が覚めた。布団から起き上がり頭をボサボサと搔く。

ここはホテルの一室。部屋は日本好きのイタリア人のオーナーによって何室かは和室となっている。そして、イタリアの特別除霊軍最高総司令官の気遣いもあってか、新井たちは和室へ案内された。新井はいつも寮ではベットで寝ているので寝苦しいことこの上ないが、折角用意された部屋を断るわけにはいかなかったのだ。しぶしぶこの部屋に泊まったのだ。

「首が痛い」

新井は首を右に一回転して、布団から出た。二度寝するというのも一つの手だが、今の新井は眠気というものが何処かに吹き飛んでしまったらしく目がパッチリと開いている。

「うおおお・・・止めるって言ってんじゃねえか」

その声のする方を見ると、石橋が気持ち良さそうに眠っていた。

この部屋には3人の布団が敷かれている。一つは新井の、もう一つは石橋の、そして最後にルニーナの布団が敷かれている。初め、新井は3人と同じ部屋ということに疑問を持っていたが、ルニーナは何も気にした様子は無く、石橋も「早く寝たい」などと言っていないので気にしない様になっていた。しかし、改めて見ると何だか異様

な光景だった。右から石橋、ルニーナ、新井という順番で寝ていたのだった。

【この娘には羞恥心こというものが無いのだろうか】

ルニーナを見ると、天使のような寝顔で寝ていた。新井は一瞬ドキツとしたが、両頬をパンパンと叩いて洗面所に向かった。

6月23日午前7時49分

「んん・・」

石橋が目覚めると、新井とルニーナがテレビを見ている姿が映った。テレビには日本の番組らしきものが映されていた。

「やっと起きたか。さっさと着替えろよ、これから朝食を食べに行く」

新井はそう言うと、テレビを消し神田に服を渡した。

「何だこの服」

「塩袒しほつて人から頼まれたらしく、このホテルの従業員の人から貰った」

「ふゝゝん」

石橋はそう言うと服を着替えに洗面所に向かった。ちなみに新井た

ちは寝ているときはパジャマ姿であつた。

「先に出てようか」

「はい」

新井はルニーナにそう言った。ルニーナもそれに同意し、2人は部屋から出て行った。

6月23日午前8時22分

「美味しいなあこの味噌汁」

石橋は味噌汁を啜りながら言った。

このホテル内にはレストランがあり、新井たちはそこで朝食を取っている。塩祖によって朝食や昼食などはタダとたっており、このレストランはバイキング形式となっている。

「しかし、新井の作る味噌汁には及ばないな」

「あんたは俺の夫か何かか」

新井はとても料理が上手だ。その腕は、そこらの三流料理人なら簡単に蹴散らしてしまうほどだった。新井はよく除霊委員会の面々に料理を振舞っていたので、このような事を言われることが多い。ちなみに、新井は料理が上手いと言われることを嫌っている。

「そんなに美味しいのですか。この味噌汁もかなり美味しいのですが」

ルニーナは味噌汁を見ながら石橋に問いかけた。

「ああ、新井の料理を食った後にこれを食べたら、もう天と地の差があるくらい不味いと感じられるほどだぞ」

「言い過ぎだ」

「まあ、食べてみりゃあ分かるからさ。今度御馳走してあげよう」

「はい。また機会があったときにでも」

「ま、俺が作るんだけどな」

6月23日午前9時16分

「さて、そろそろ行くか」

石橋そう言つと、新井たちと部屋を出た。

「玄関前にもう一人の仲間が待っているので、玄関前に行ったら紹介します」

「おう」「ああ」

新井と神田は殆ど同時に返事をした。

II・III moment rest（後書き）

なかがきもどき〜辞書編〜

キウスリー

どうもQQQです。多分皆さん名前を忘れてるか知らないと思うので、ここで名乗っておきます。

さて、なかがきもどきです。辞書編です。何故『辞書編』なのかというと、この作品の中に分らない単語が出てきたと思います。作者も時々分からなくなります。なので、この場をお借りして分からない、謎だつてというような言葉の意味を説明したいと思います。

まず第一回は・・・『エンジェルアポメント天使の下界移動』です。

天使の下界移動とは、簡単に言うと『天界にいる天使が、下界（我々の居る世界）へ来ることです』。

本来、天界と下界は全く別の世界なのですが、小波町の穂都堀神社ほとぼりじんじやは年に一度、12月12日に天界と下界を繋ぐ道を作るのです。

12月11日に穂都堀神社の鳥居の周りに様々な色の花を置き、そして12日の午前0時になった時、天界と下界が繋がります。昔は花の代わりに、5人の人間の死体が使われていました。

天使が行き来するのが主な方法ですが、人間も天界に行くことができます。そうした場合、人間の方は天界に充滿されている悪性霊工ネルギーによって、脳に障害がでたり急にガンが出来て死に至ったりします。

天使の方は、12月13日になると二度と天界に戻れなくなり、天使の能力も失ってしまいます。

分かりましたか？バツサリと書いてみたものの、何て分かりにくい辞書なんだ。まあ、皆さんは優しいので文句等は言ってこないと思

います（鬼の様な笑顔）。

では、感想や評価を待ってますので、よろしくお願いします。

そういえば、辞書って何？美味しいの？

I I・I V m o m e n t r e s t 2 (前書き)

どうもQQQQです。

これの前に、『世にも奇妙な愚痴ごぼし』という短編小説を書きました。暇があればそちらの方も呼んでいただきたい！！それは置いておいて、では、この小説をお楽しみください。

II - IV moment rest 2

6月23日午前9時24分

ホテルの出口付近で一人の男が話しかけてきた。年は新井と同学年くらい。髪の色は黒色で、周りが外国人なのでか生粋の日本人という感じが漂っている。

「はじめまして、木枯^{こがらし}といいます。昨日は、任務情報の資料を手に入れたりして会うことが出来ませんでした、今日からは任務を手伝うことが出来ますので・・・」

「おいおい、硬いなあ。年も近いんだからもっと気軽にいいのに」

「はあ・・・」

「そうそう。石橋さんの言う通りだって。まあ、この人はどんな人でも殆どはタメ口^{ほとん}だけだな」

「指を差して言うな！」

石橋は、新井の手を払いのけた。

「そういえば、資料がどうかこうとかって言ってたな」

「このことですか」

木枯はポケットから紙を3枚とりだして新井に渡す。その紙には、グランプの地図が書いてあり、所々に×印が13個打ってあった。

「このバッテンは何だ」

「これは墮天使が目撃された所の印です」

「そうか・・・とりあえず地図が3枚あることだし、二手に分かれて探すか」

新井の提案に3人は頷いた。

6月23日午前9時34分

「まずはここか」

新井とルニーナはとあるビルの前に来ていた。

「中に入りましょう」

ビルの中に入ると、受付の人が声をかけてきた。

「特別除霊軍です。この建物を調べさせてください」

ルニーナは特別除霊軍の認証書を見せながら、イタリア語で言った。

「そうですか、少々お待ちください」

受付の人は電話を掛けた。多分ここの社長の了解を得ようとしているのだろう。

「社長の了解も得ましたので、どうぞお調べください」

そついうと、受付の人は他の人の対応をしに行った。

「了解を得ました。自由に調べていいそうです」

「そうか。よし、だったらさっさと調べようか」

新井とルニーナは階段を使って目撃情報がある屋上に向かった。

6月23日午前9時40分

「何もないなあ」

新井はポツリと呟く。

「そろそろ下に下りましょう」

ルニーナの提案に新井は賛成した。

屋上からまた階段を使って下りる。

「そういえば、さっきも石橋さんも言ってたけど、もっと気楽に話してくれればいいぞ」

新井は階段を下りながらルニーナに言う。

「しかし・・・」

「大丈夫だよ。何か敬語で話されると逆に困るというか・・・まあ、気軽に『くま』とでも呼んでくれ」

「なぜくま？」

「ああ、あらいくまのくまからとっただけ。まあ、俺も知らない間に付けられてたからなあ」

「そうですか・・・では、くまさん」

「まださん付けか。で、何だ」

「朝、僕が寝ているときに欲情していたでしょ」

「・・・お前、見かけによらず口悪いな。それに僕って・・・」

「何ですか。女が僕っていつたらいけないのか。僕の寝顔を見て興奮してる変態に言われたくないけど」

「興奮してなんかねえよ！お前、あの時起きてやがったのか」

「ええ、もうバツチリと」

まさかルニーナがこんなにも口が悪いとは思っていなかった新井は、溜息を付いた。

「溜息なんて付いて、あなたはオッサンですか」

キツイ一言を言われ、
またも新井は溜息を付く。

II・IV moment rest 2（後書き）

今回のあとがきは二部構成です。

ながきもどき〜辞書編〜

またもやってきました辞書編です。「またかよー!」ってかたも、是非見てもらえると嬉しいですよ。

今回は、『魂循環』についてです。

魂循環とは、死んだ生物の魂は無限に繰り返し使われるということです。良い魂も悪い魂も、どちらも前世のことを綺麗に洗い流されて新しい魂になります。つまり魂は、増えることなく永遠に均一するということになります。しかし、後に紹介する『人魂増減』によって、この体制は大きく崩れることになります。

魂循環については、これくらいの説明がベストだと思います。あんまりゴチャゴチャ書いても仕方ないし・・・

ながきもどき〜番外編予告〜

この番外編では、今書いているエピソードの裏の話を書いていきたいと思っています。第一回目は、『亜美の怒りと神田苦勞』にでもしたいと思います。これは、新井がイタリアに行った次の日の勉強会の話です。

楽しみにしてくれる人は是非読んで、興味がないっていう人はとばしてくれてOK。そんな感じでこういうのをやっていきます。

ではでは、感想等も待っていますので、よろしく願います。

あれ、じつじつので流れきってるよ、うな・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9880f/>

小波高校 除霊委員会

2010年10月17日15時46分発行